



338
191



始



25 228

338-19

正岡子規著

俳書堂藏版

俳諧
大要

俳人
燕村

俳句
問答

俳句
の
年間
四

大正
2. 7. 25

内交

東 大
京 阪
都 京

初
山
書
店

俳諧大要……………一—一八

俳人蕪村……………一—一五

俳句問答

上卷……………一—一九

下卷……………一—二九

四年間……………一—二七〇

四半問

下卷

上卷

將問答

將入燕林

將編大要

一五

一五

一五

一五

一五

俳諧大要

俳諧大要目次

第一	俳句の標準……………	二	頁
第二	俳句と他の文學……………	五	頁
第三	俳句の種類……………	八	頁
第四	俳句と四季……………	十一	頁
第五	修學第一期……………	二十	頁
第六	修學第二期……………	七十七	頁
第七	修學第三期……………	百六十二	頁
第八	俳諧連歌……………	百六十九	頁

辨精大要目次

第一章	辨精の源流	一
第二章	辨精の分類	二
第三章	辨精の歴史	三
第四章	辨精の地理	四
第五章	辨精の人物	五
第六章	辨精の書物	六
第七章	辨精の詩歌	七
第八章	辨精の音楽	八
第九章	辨精の美術	九
第十章	辨精の宗教	十
第十一章	辨精の政治	十一
第十二章	辨精の経済	十二
第十三章	辨精の教育	十三
第十四章	辨精の法律	十四
第十五章	辨精の外交	十五
第十六章	辨精の国防	十六
第十七章	辨精の外交	十七
第十八章	辨精の国防	十八
第十九章	辨精の外交	十九
第二十章	辨精の国防	二十

俳諧大要

瀬祭書屋主人編

こゝに花山といへる盲目の俳士あり望一の流れを汲むまにはあま
 で只幾句をなん詠み出でけるやうく、に此わざを試みてより半年
 に足らぬ程に其聲譽騰として隣々者耳を缺つ一夜我假住居をおさ
 づれて共に蟲の音を愛づるついでに我も發句といふものを詠ま
 ざはすれどたよるべきすぢもなし君わがために心得さなるべきく
 だりく、を書きてんやさせつに請ふ答へて君が言好し昔は目なし
 ぢちく、後について來ませさか聞きぬわれさるひじりを學ぶさは
 なげぬと覺えたる隣りはひが言まじりに傳へんながく、に耳にも
 つはらなるこそ正覺のたよりあるべけれいざく、さ筆をばしらむ
 僅かに其綱目ばかりを擧げてこれを松風會諸子にいたす諸子幸ひ
 に之を花山手に傳へてよ

第一 俳句の標準

二

一俳句は文學の一部あり文學は美術の一部あり故に美の標準は文學の標準なり文學の標準は俳句の標準なり即ち繪畫も彫刻も音樂も演劇も詩歌小説も皆同一の標準を以て論評し得べし

一美は比較的なり絶對的に非ず故に一首の詩一幅の畫を取て美不美を言ふべからず若し之を言ふ時は胸裡に記臆したる幾多の詩畫を取て暗々に比較して言ふのみ
一美の標準は各個の感情に存す各個の感情は各個別なり故に美の標準も亦各個別なり又同一の人にして時に從

つて感情相異なるあり故に同一の人亦時に從つて美の標準を異し
一美の標準を以て各個の感情に存すとせば先天的に存在する美の標準なるもの有る無し若し先天的に存在する美の標準(或は正鵠を得たる美の標準)ありとするも其標準の如何は知るべからず從つて各個の標準と如何の同異あるか知るべからず即ち先天的標準なるものは吾人の美術と何等の關係を有せざるなり
一各個の美の標準を比較すれば大同の中に小異なるあり大異の中に小同なるありと雖も種々の事實より歸納す

三

れば全体の上に於て永久の上に於て略々同一方向に進むを見る譬へば船舶の南半球より北半球に向ふ者一は北東に向ひ一は北西に向ひ時ありて正東正西に向ひ時ありて南に向ふもあれど其結果を概括して見れば皆南より北に向ふが如し此方向を指して先天的美の標準と名づけ得可くば則ち名づく可し今假りに概括的美の標準と名づく

一同一の人にして時に従ひ美の標準を異にすれば一般に後時の標準は概括的標準に近似する者あり同時代の人にして各個美の標準を異にすれば一般に學問智識ある

者の標準は概括的標準に近似する者なり但し特別の場合には必ずしも此の如くならず

第二 俳句と他の文學

二俳句と他の文學との區別は其音調の異なる處に在り他の文學には一定せる音調有るもあり無きもあり而して俳句には一定せる音調有り其音調は普通に五音七音五音の三句を以て一首と爲すと雖も或は六音七音五音なるあり或は五音八音五音なるあり或は六音八音五音なるあり其他無數の小異あり故に俳句と他の文學とは嚴

富に區別す可らず

六

一俳句と他の文學との音調を比較して優劣あるなし唯風詠する事物に因りて音調の適否あるのみ例へば複雑せる事物は小説又は長篇の韻文に適し單純なる事物は俳句和歌又は短篇の韻文に適す簡樸なるは漢士の詩の長所なり精緻なるは歐米の詩の長所なり優柔なるは和歌の長所なり輕妙あるは俳句の長所なり然れども俳句全く簡樸精緻優柔を缺くに非ず他の文學亦然り

一美の標準は美の感情に在り故に美の感情以外の事物は美の標準に影響せず多數の人が賞美する者必ずしも美

ならず上等社會に行はるゝ者必ずしも美ならず上世に作爲せし者必ずしも美ならず故に俳句は一般に弄ばるゝが故に美ならず下等社會に行はるゝが故に不美ならず自己の作あるが故に美ならず今人の作あるが故に不美ならず

一一般に俳句と他の文學とを比して優劣あるなし漢詩を作る者は漢詩を以て最上の文學と爲し和歌を作る者は和歌を以て最上の文學と爲し戯曲小説を好む者は戯曲小説を以て最上の文學と爲す然れども是れ一家言のみ俳句を以て最上の文學と爲す者は同じく一家言ありと

七

難は俳句も亦文學の一部を占めて敢て他の文學に劣る無し是れ概括的標準に照して自ら然るを覺ゆ

第三 俳句の種類

- 一 俳句の種類は文學の種類と略々相同也
- 一 俳句の種類は種々ある點より類別し得べし
- 一 俳句を分ちて意匠及び言語(古人の所謂心及び姿)とす意匠に巧拙あり言語に巧拙あり一に巧にして他に拙なる者あり兩者共に巧なる者あり兩者共に拙なる者あり
- 一 意匠と言語とを比較して優劣先後あるを以て只意匠の美

を以て勝る者あり言語の美を以て勝る者あり

- 一 意匠に勁健あるあり優柔あるあり壯大あるあり細纖なるあり雅樸あるあり婉麗あるあり幽遠なるあり平易なるあり莊重なるあり輕快あるあり奇警あるあり淡泊なるあり複雑なるあり單純なるあり眞面目あるあり滑稽突梯あるあり其他區別し來れば千種萬様あるべし
- 一言語に區別あるは意匠に區別あるが如し勁健なる意匠には勁健ある言語を用ゐざるべからず優柔ある意匠には優柔なる言語を用ゐざるべからず雅樸なる言語は雅樸なる意匠に適し平易ある言語は平易なる意匠に適す

- 其他皆然り
- 一意匠に主観的なるあり客観的あるあり主観的とは心中の状況を詠じ客観的とは心象に寫り來りし客観的の事を物を其儘に詠するなり
- 一意匠に天然のあるあり人事的なるあり人事的とは人間萬般の事物を詠じ天然的とは天文地理生物礦物等總て人事以外の事物を詠するなり
- 一以上客種の區別皆優劣あるなし
- 一以上各種の區別皆比較的の區別のみ故に嚴密に其區域を限るべからず

一人にして各種の變化を爲す者あり一人にして一種に長ずる者あり

第四 俳句と四季

- 一俳句には多く四季の題目を詠す四季の題目無きものを雜と言ふ
- 一俳句に於ける四季の題目は和歌より出で、更に其區域を廣くしたり和歌に在りては題目の數僅々一百に上らず俳句に在りては數百の多きに及べり
- 一俳句に於ける四季の題目は和歌より出で、更に其意味

を深くもたう例へば「涼し」と言へる語は和歌には夏にも用ゐ又秋涼にも多く用ゐたるを俳句には全く夏に限られたる語とし秋涼の意には初涼新涼等の語を用ゐしが今は漸くは其語も廢れ涼の字は只夏季専用の者と爲れり即ち一題の區域は縮小したると共に其意味は深長と爲りたるなり

一 單に月と稱すれば和歌にては雜とあるべし俳句にては秋季とあるなり時雨は和歌にては晩秋初冬共に之を用ゐ殊に時雨を以て木葉を染むるの意に用ゐ俳句にては時雨は初冬に限れ

者殆んど之れ無し霜は和歌にては晩秋より之を用ゐ亦紅葉を促すの一原因とす俳句にては霜は三冬に通じて用ゐれど晩秋には之を用ゐず從ひて紅葉を促すの一原因となさず俳句季書の書には秋霜の題を設くと雖も其作例は殆んど見る無し

一 梧桐一葉落の意を詠じなば和歌にても秋季と爲るべし俳句にては桐一葉を秋季に用ゐるのみならず只桐と言ふ一語にては秋季に用ゐる事あり鷹狩は和歌にても冬季なり俳句にては鷹狩を冬季に用ゐるのみならず只鷹と言ふ一語も冬季に用ゐる事あり

二四季の題目にて花木花草木實草實等は其花實の最多き時を以て季と爲すべし藤花牡丹は春晩夏初を以て開く故に春晩夏初を以て季と爲すべし必ずしも藤を春とし牡丹を夏とするの要なし梨西瓜等亦必ずしも秋季に屬せずして可なり

一古來季寄に無き者も略季候の一定せる者は季に用ゐる得可し例へば紀元節神武天皇祭等時日一定せる者は論を峻たず氷店を夏とし燒芋を冬とするも可なり又虹の如き雷の如き定めて夏季と爲す或は可からんか

一四季の題目中虚抽象的なる者は人爲的に其區域を制限

するを要す之を大にしては四季の區別の如き是なり春は立春立夏の間を限り夏は立夏立秋の間を限り秋は立秋立冬の間を限り冬は立冬立春の間を限り即ち立冬一日後敢て秋風と詠すべからず立春一日後敢て春月と詠すべからず

一長閑、暖麗、日永、暄は春季と定め短夜、涼熱は夏季と定め冷凄、朝寒、夜寒、坐寒、漸寒、肌寒、身に入、夜長は秋季と定め寒、つめたしは冬季と定む日の最長きは夏至前後なり然れども俳句にては日永を春とす夜の最長きは冬至前後なり然れども俳句にては長夜を秋とすこれは理屈より出で

夫して感情に本づきたるの致す所あり斯く一定せし上
 は日永夜長は必ず春秋に用うべし他季に混すべからず
 一其外霞陽炎東風の春に於ける薰風雲峰の夏に於ける露
 霧天河月野分星月夜の秋に於ける雪霰氷の冬に於ける
 が如きも亦皆一定する所なれば一定し置くを可とす然
 れども夏季に配合して夏の霞を咏じ秋季に配合して秋
 の雲峰を咏するの類は因より妨ぐる所あらず
 一四季の題目を見れば則ち其時候の聯想を起す可し例へ
 ば蝶といへば翩翩たる小羽虫の飛び去り飛び来る一個
 の小景を現はすのみならず春暖漸く催し草木僅かに萌

芽を放ち菜黄麥綠の間に三々五々士女の嬉遊するが如
 き光景をも聯想せしむるなり此聯想ありて始めて十七
 字の天地に無限の趣味を生ず故に四季の聯想を解せざ
 る者は終に俳句を解せざる者なり此聯想無き者俳句を
 見て淺薄なりと言ふ亦宜なり(俳句に用うる四季の題目
 は俳句に限りたる一種の意味を有すといふも可なり)
 一雜の句は四季の聯想無きを以て其意味淺薄にして吟誦
 に堪へざる者多し只雄壯高大なる者に至りては必ずし
 も四季の變化を待たず故に間々此種の雜の句を見る古
 來作る所の雜の句極めて少きが中に過半は富士を詠じ

たる者なり而して其吟誦すべき者亦富士の句なり
 一或人問ふて曰く時間を人爲的は限りてこれに命名し以て題目となす事は既に説を聞けり空間は何故に制限して之に命名せざるか答へて曰く時間は年々同一の變化を同一の順序に従ひて反覆するが故に之を制限して以て命名すべし然れども空間の變化は毫も順序なる者あらずして不規則なる者なり例へば山嶽河海郊原田野一も順序ある者なし故に之に命名せんと欲せば人間の見聞し得る所の處一々に命名せざるべからず地名是なり地名は時間の區別に比して更に明瞭なる區別なれば俳

句に地名を用うるは最簡單なる語を以て最錯雜なる形象を現すの一良法なりと雖も奈何せん一人にして地球上の地名と其光景とを盡く知るを得ず且つ其區別明瞭なるが故に之を用うるの區域甚だ狹隘を感ずるなり他語以て之をいへば四季の名稱に對する者は地名なりと雖も地名は區域明瞭に過ぎて狹隘に失し且つ其地を知らざる者には何等の感情をも起さしむる事難し即ち四季の變化は何人も能く之を知ると雖も東京の名所は西京の人之を知らざる者多く西京の名所は東京の人之を知らざる者多きが如きなり

第五 修學第一期

一俳句をものせんと思はゞ思ふまゝをものすべし巧を求むる莫れ拙を蔽ふ莫れ他人に耻かしがる莫れ

一俳句をものせんと思ひ立ちし其瞬間に半句にても一句にてもものし置くべし初心の者は兎角に思ひつきたる趣向を十七字に綴り得ぬとて思ひ棄つるを多き太だ損なり十七字にならねば十五字十六字十八字十九字乃至二十二三字一向に差支なし又みやびたるしやれたる言葉を知らずとて趣向を棄つるも誤れり雅語俗語漢語佛

語何にても構はず無理に一首の韻文となし置く可し

一初めより切字四季の題目假名遣ひ等を質問する人あり萬事を知るは善けれど知りたりとて俳句を能くし得べきにあらず文法知らぬ人が上手な歌を作りて人を驚かす事は世に例多し俳句は殊に言語文法切字假名遣など一切無き者と心得て可なり併し知りたき人は漸次に知り置く可し

一俳句をものしたる時は其道の先輩に示して教を乞ふも善し初心の者の耻かしがるは却てわろし中々に初心の時句は俗氣をはなれてよろしく少し巧になりし後は

なまなかに俗に陥る事多し
 一初心の耻かしがりてもし得べき句をものせぬはわる
 けれど耻かしがる心底はどうかまして善き句を得たし
 との望なればいと殊勝なり此心は後々までも持ち續き
 たし
 一自ら多く俳句をものして人に見せぬ者あり教を乞ふべ
 き人無しと思はゞ見せずとも可なり多くものする内に
 は自然と發明する事あり先輩に聞けば一口にして知り
 得可き者を數月數年の苦辛を経て漸く發明するが如き
 は稍々迂に似たれども中々に迂ならず此の如く苦辛し

て得たる者は腦中に染み込む事深ければ再び忘るゝ事
 無く(一)句をものする上に應用し易く(二)且つ他日又發明
 するの端緒となる可し(三)
 一自らものしたる句は紙片に書き記し置く可し時々繰り
 返して己の句を吟む見るも善し其間に前に言ひ得ざり
 し事を言ひ得るもあらん又己の進歩を知るたよみとも
 なりて一はひとり面白く一は更に一段の進歩を促す事
 あるべし
 一四季の題目は一句中に一つづゝある者と心得て詠みて
 心を可とす担しあながちに無くてはならぬとは非ず

一 成るべく其時候の景物を詠ずる事聯想が早く感情が深くしてものし易し尤も春に居て秋を思ひ夏に居て冬を思ふ事も全く缺くべからず只興の到るに任せて勝手たる可し

一 自ら俳句をものする側に古今の俳句を読む事は最必要なり且つものし且つ讀む間には著き進歩を爲す可し己の句に並べて他人の名句を見る時は他人の意匠慘澹たる處を發見せん他人の名句を讀みて後自ら句をものする時は趣向流出し句調自在になりて名人の己に乗り繼りたらんが如き感ある可し

一 自ら著く進歩しつゝあるが如く感じたる時或は何とは無ければ只無闇に趣向の溢れ出るが如く感じたる時は其機を透かさず幾何にても出来るだけのし見る可しかゝる時はたしかに一段落をあして進歩す可き時機にして佛教の大悟徹底基督教の降神と其趣を同じくし心中に一種微妙の愉快を感せん但し斯る事は俳句修學の上にも幾度もある事なり一度ありたりとて自から已に大悟徹底したるが如く思はゞ野狐禪に墮ちて五百生の間輪廻を免かれざる可し志は大にすべき事を

一 古人の俳句を讀まんとならば總じて元祿明和安永天明

一の俳書を可とす就中俳諧七部集續七部集蕪村七部集三
 傑集など善し家集にては芭蕉句集柯本にては善けれど
 玉石混淆し居る故注意す可し去來發句集丈草發句集蕪
 村句集などを讀む可し但しいろいろも多少は悪句あるを
 免れず中にも尤も悪句少なきは猿蓑俳諧七部集の内
 蕪村七部集蕪村句集位なる可し(故人五百題は普通は坊
 間に行はれて初學には便利あり) 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

一 古句を半分位竊み用うるとも半分だけ新らしくば苦か
 らず時には古句中の好材料を取り來りて自家の用に供
 す可し或は古句の調に擬して調子の變化をも悟る可し
 二月並風に學ぶ人の多く初めより巧者を求め婉曲を主と
 す宗匠亦此方より導く故に終に小細工に落ちて活眼を
 開く時無し初心の句は獨活の大木の如きを貴ぶ獨活は
 庭木にもならずとて宗匠達は無理にひねくりたる松な
 るを好むゆゑ尤も箱庭の中にて俳句をものせんとす
 ばそれにては好し然り宗匠の俳句は箱庭的なり併し俳
 句界はかゝる窮屈ある者に非ず

一 初心の人古句に己の言はんと欲する者あるを見て古人
已に俳句を言ひ盡せりやと疑ふ是れ平等を見て差別を
見ざるのみ試みに今一步を進めよ古人は何故に此好題
目を遺して乃公に附與したるかと怪むに至るべし
一 初心の人天の川の題を得て句をものせんとす心頭先づ
浮び来る者は

あら海や佐渡に横たふ天の川 芭蕉
真夜中やふりかはりたる天の川 嵐雪
更け行くや水田の上の天の川 惟然
などなる可し此時千思萬考佳句を探るに天の川の趣は

終に右三句に言ひ盡されて寸分の餘地だも無き心地す
乃ち筆を抛て大息して曰く已みあんと已にして古
俳書を繕く天の川の句頻りに目に觸るゝを覺ゆたとひ
上乘にあらざるも皆一種の句調と趣向とを備へて必ず
しも陳腐ならず例へば

一 僕を雨に流す天の川 浪化
打ち叩く駒のかしらや天の川 去來
引はるや空に一つの天の川 乙州
西風の南に勝つや天の川 史邦
よひくに馴れしか此夜天の川 白雄

天の川星より上に見ゆるかあ 同

江に沿ふて流るゝ影や天の川 曉臺

天の川飛びこす程に見ゆるかな 土朗

天の川、糸の涼み過ぎにけり 同

天の川、田守とはさす真上かあ 乙二

よもて、れすす竿のはづれや天の川 嵐外

土張つら巨龍、山背一筋の時、閑と、誠、同、さ、海、ま

舟、山、風、や、の、燈、も、の、檜、も、天、の、川、の、同、さ、は

な、き、もの、したる、或は、滑稽に、或は、壯大に、或は、異率に、或は

奇抜に、或は、人事的に、十人十色あるを、思入ば、初めの、我思

案をも描かりければ天の川を只大きく天にひろがりたる

ものと許り見し故に趣向は浮ばざりしなり成るはど七

夕星を人間と見てそれが戀の爲めに裾引つからげて天

の川を渡る處を思ひなば可笑しき事もありかん日暮

れて馬上に銀河を見上げたる處山上樹木鬱葱たる上に

銀河の白くかゝりたる處途上の人と咄しながら不圖仰

向けば銀河の我首筋に落ちかゝる處天の川を大きく見

ず却て二三尺程の溝川の如く見立てたる處或は七夕に

一手向けたる頼鼻禪の銀漢をかきしてひらりと翻る處

見様によれば只一筋の天の川は幾様にも變り得べき者

- なりしを合點するなるべし
- 一 なまじいに他人の句を二三句許り見聞きたる時は外に趣向奇き心地す十句二十句百句と多く見聞く時は却て無数の趣向を得べし古人が既に己の意匠を言ひ居らん事を恐れて古句を見るを嫌ふが如きは耳を掩ふて鈴を盗むよりも猶可笑しきわざあり
 - 一 一題一句づゝ多くの題につきて句を試ひるも善し或は一題十句一題百句あとの如く一題にて出来るだけの變化を試ひるも善し
 - 一 一題百句あをものせんとする時は始めの四五句を得

- るに非常の苦吟を感ず可し其後は稍々容易にもものし得て二三十句に達したる後は百句立どころに辨すべく猶百句位は出来べき心地すべし
- 一 連坐點取ちど人と競争するも善し秀逸の賞品を得るが如きは卑野にして君子の爲すべき所に非ず俳句の下巻文は巻を取るの苦しからず時宜に由りて俳書を賞品と爲すも善かる可し
 - 一 三笠附懸賞發句募集其外博奕に類し私利に關する事はたつさはるべからず
 - 一 一時間に幾十百句をものするも善し數日を費して一句

を推敲するも善し早くものすれば放膽の方に養ふ所あり
苦しみてもものすれば小心の方に得る所あり

一俳句の中に言語又は材料の解する能はざる者あらば索引書又は學者に就きて之を問ひ糺す可し言語材料盡く分明に解し得ながら一句の意味に解する能はざる所あらば自ら熟思す可し熟思して得ざれば則ち學者に問へ
一初學の人俳句を解するに作者の理想を探らんとする者多し然れども俳句は理想的の者極めて稀に事物をありの儘に詠みたる者最も多し而して趣味は却て後者に多く存す例へば

古池や蛙飛びこひ水の音 芭蕉

といふ句を見て作者の理想は閑寂を現はすにあらんか
禪學上悟道の句ならんか或は其他何處にかあらんなど
穿鑿する人あれどもそれは只だ其儘の理想も何も無き句と見る可し古池に蛙が飛びこんでキャブと音のしたのを聞きて芭蕉がしかく詠みしものあり

稻妻やきのふは東けふは西 其角

といふは諸行無常的理想を含めたるものにて俗人は之を佳句の如く思ひもてはやせども文學としては一文の價值無きものあり

一初學の人にして譬喩、難題、冠附、冠履、回文、盲附、俳句、時事雜詠等の俳句をものせんとする人間々あり然れども此等の條件は皆な文學以外の分子にして言はゞ文學以外の事に文學の皮を被せたる者なり故に普通に言ひおほせたりとて俳句にはあらぬなり若し此の如き題をものしてしかも多少の文學的風韻あらしめんとするは老熟の上の戯れあり初學の企て及ぶ所にあらず

一學識無き者は雅俗の趣味を區別すること難く學識ある者は理想に偏して文學の範圍外にさまよふこと多し然れども終局に於て學識ある者は學識無き者にまさるこ

と萬々あり

一文章を作る者詩を作る者小説を作る者俄かに俳句をものせんとして其語句の簡單に過ぐるを覺ゆ曰く俳句は終に何等の思想をも現はす能はずと然れども是れ聯想の習慣の異なるよりして來る者にして複雑なる者を取て盡く之れを十七字中に収めんとする故に成し得ぬなり俳句に適したる簡單なる思想を取り來らば何の苦も無く十七字に収め得べし縦し又複雑なる者ありとも其中より尤文學的俳句的ある一要素を抜き來りて之を十七字中に収めざば俳句とある可し初學の人は議論する

より作る方こそ肝心かめれ

一俳句の古調を擬する者あれば「古し」焼直しかりなどゝて宗匠輩は擯斥すめり何ぞ知らん自己が新奇として喜ぶ所の者盡く天保以後の焼直しに過ぎず同じく是れ焼直しかりとも金と鉛とは自ら價值に大差あり初學者惑ふ莫れ

一古俳書ありとも俳諧の理屈を説きたる者は初學者の見るべき者に非ず蕉門の著書と雖も十中八九は誤謬あり其精神は必ずしも誤謬ならざるも其字句は其精神を寫す能はずして後生の惑を來す者比々皆是かり若し假名

遣手彌波杯を學ばんと思はゞ俳書に就かずして普通の和書に就け古言傍詞の八千衢、詞の玉の緒等幾何もあるべし

一俳諧は滑稽ありとて滑稽あらざるは俳句にあらずといふ人あり局量の小ある一笑するに堪へたり是れ已れ偶と滑稽よりして俳諧に入りしかばしか言ふのみ濁酒を好む馬士の清酒を飲んで酒に非ずといひたらんが如し
一初學の人に於て自己の標準立たずとて苦にする者あり尤もの事なれども苦にするに及ばず多くものし多く讀むうちにはおのづと標準の確立するに至らん

一俳句は只已れに面白からんやうにもすべし已れに面白からずとも人に面白かれと思ふは宗匠門下の景物連の心がけあり縮緬一匹金時計一個を目あてにして作りたる者は縮緬と時計とを取り外したるあとにて見るとし我々がら拙し卑しと驚く程の句あるべし

二間ある時に是非とも俳句をものせんとあがくも宜しからず忙しき時に無理に俳句をものせんとあやむも宜しからず出づる時は出づるに任せ出ぬ時は出ぬに任すべし間ある時一句をも得ずして忙しき時に數句を立せざるに得る事あり尤おもしろし

一俳句のために邪念を忘れたるは善しゆめ本職を忘るべからず然れ共熱心あらざれば道に進まず熱心あれば本職を忘るゝに至る其程度を知るは其人に在り

一俳句の題は普通に四季の景物を用う然れども題は季の景物に限るべからず季以外の雜題を取り季を結んでものす可し兩者並び試みざれば終に狹隘を免れざらん

一俳句の題は必ずしも其題を主としてものするを要せず只其題を詠みこまばそれにて十分あり例へば頭巾といふ題を得たる時に頭巾を主としてものすれば俗に陥り易く陳腐に傾き易し故に時々此題を軽く詠みこみて他

へそらすことも忘るべからず
 只其頭巾取り襟つくりふや富士の晴れ
 湖春
 といふが如き富士を主としたるものをもつるも差支
 無し此の如くならざれば盡く陳腐に流れて而も變化す
 べき區域狭くなる可し故に俳句の題は和歌の如く題に
 叶ふ叶はぬをやかましく穿鑿するに及ばず
 一俳句の題を得たる時はそれを主とせずして可あるのみ
 ならず其題を全く空想中の物とあして實在せしめざる
 も亦可なり例へば葛といふ秋季の題を得たる時

野の宮の鳥居に葛もあかりけり 涼菟

の如く葛といふ實物を句中に現在せしめざるも差支無
 しこれにて矢張り秋季と爲るなり

一月並者流の題に文字結と言ふ事あり例へば雪の題にて
 結字「後」と定められたる時は雪の句の中に「後」の字をも詠
 みこひなりこれは單に雪の題ならば俗俳家が古人の雪
 の句を剽竊し來り又は自己の古き持句を幾度も出さん
 とする者多き故に之を豫防するの策なり苟も徳義を解
 し廉耻を知る人に對して爲す可きに非ず况んや文字結
 かる者は到底佳句を得る能はざるをや

一他人が悪しと言ふ句も己が善しと思はゞ人に構はず其種類をもつ可し若し其種の句にして果して悪き者ならば長くものし多くものする間には自然と厭嫌を生ず可し

一初學の人古人の俳句を見て毫も解する能はざる者多しと云す是れ畢竟古句を見る事の少きがためなり古句解すべからずとて俳句は學び難しと爲すに及ばず能く解し得る者よりして道に進む可し

一或は解し難きの句をもつるを以て高尚なりと思惟するが如きは俗人の僻見のみ信屈ある句は貴からず平凡

なる句は亦かくに貴し

一俳句の妙味は終に解釋す可からざるを以て各人の自悟を待つより外おしと雖も字句の解釋に至りては固より容易に説明し得べし故に初學者の爲めに古句の解説を奥へ併せて多少の批評を爲す可し

(修學第一期中に列ねたる條項は思ひつくまゝに記したるを以て前後錯綜重複あるを免れず讀者請ふ之を諒せよ)

一 朝顔に釣瓶取られてもらひ水 千代
朝顔の蔓が釣瓶に巻きつきて其蔓を切りちぎるに非れ

は釣瓶を取る能はずそれを朝顔に釣瓶を取られたといひたるあり釣瓶を取られたる故に餘所へ行きて水をもらひたるといふ意あり此もらひ水といふ趣向俗極まりて蛇足なり朝顔に釣瓶を取られたと許りにて却て善しそれも取られてとは最俗なり唯朝顔が釣瓶にまどひ付きたるさまをおどかしくものするを可とす此句は人口に膾炙する句かれども俗氣多くして俳句とはいふべからず

一 井戸端の櫻あぶかし酒の酔い秋色

これは秋色といふ女が十三歳の時ものして上野の櫻に

結びつけたりとて其櫻を秋色櫻と名づけ今も清水堂の裏手に圍ひたる老樹あり井戸も其側に残りありされども考證家の説に據れば眞の秋色櫻の位置は此處にあらざして摺鉢山に近き方ありと此意は井戸端に櫻の咲きたるを見んとて酔せし人の何の氣も無く其木の下に近よるにぞ若し過つて井の中に落ちもやせんと氣遣ひたるあり「あぶかし」といふ語の主格は酔人にして櫻にあらずしかも其の酔人といふ語は無く只「酒の酔」と虚にいひたるのみなれば普通の文章のやうに解しては解し難きわけありさて此の句も千代の朝顔の句と同じく俗に

して見るに堪へず只千代のに比すれば俗氣少からんか

一 蚊にこまる蚊もまたこまる團扇か 失名

誰の句とは知らねど俗間に傳稱する句あり意義は解釋する迄もあし此句の如きは俗の又俗あるものにして前二句に比するも亦數等の下に在り只俗間此の如きものを發句と稱へ居る者多き故に其の妄を辨ずるのみ

一 何事ぞ花見の人 長刀 去來

意は長刀さしたる人の花見に出掛けたるを咎めたるあり花見とあらばいかめしき長刀をさして群衆の中へ出る

でもあるまじきに其の無風流は何事ぞと嘲りたるなり此等は多少の理想を含み居る故に俗間に傳はり稱せらるれども名句と言ふは必ずしも此種の句に限らざるあり否此種の句は尤も卑俗あり易きものと知るべし此句は此の如く理想を含みたる句の上にては上乘とすべき名句あれども初學者の此種の句を學ぶは最も危し

一 蒲團着て寝たる 姿や東山 嵐雪

これは實景を知らぬ人は其味を解し難し試みに京都に行きてつくくと東山を見る可し低き山の近くに在りてしかも頂の少しづゝ高低ある處恰も人が蒲團をかぶり

て寝たるに似たりさればこそ此譬喩的の吟ありたるな
れ此句は品の善き句にあらねども滑稽と輕妙とを以て
勝りたるものにして容易に摸倣し得べきに非ずしかし
て此の句につきては俗人は勿論普通の文學者にも解し
難き俳句上の特色ありそは冬[◎]の季[◎]といふとかり蒲團は
冬季にして此句は蒲團を譬喩に用ゐたれども他に季と
すべき者おければ矢張り冬季と爲るかり俗人の解する
が如く此句を單に東山の譬喩とするのみならば一寸を
かき許りにて何の趣も無き譯なれども冬季に在る故
に趣を生ずるなりさすがの都も冬枯^{わづか}れて見るもの淋し

く寒さが中に彼の東山を見ればこれも春の頃のちまめ
きたる様子を捨てし只ひつそりと寒さうに横はる處如
何にも蒲團うちかぶりて寝たると見れば淋しさの中に
多少のをかしみもありて何となく面白う感ぜらるゝか
り人若し之を疑はゞ夏の東山を見て此句を味ひ更に冬
の東山を見て此句を味ひ以て其趣の多少を比較す可し
必ず發明する所あらん

一 我雪とおもへば輕し傘の上は其角

普通に「我ものと思へば輕し傘の雪」として傳はれりさ
れど「我もの」としては甚だ俗かり「我雪」の方に從ふべし意

味は解釋する迄も無しとは端唄かぞに入りたるため多
少艶体に近き感を生じ俗人は有難がれど是即ち此句の
俗ある所以あり其角の句としては斬新を以て賞す可し
若し之を摸倣する者あらば直ちに邪路に陥ると必定也

一 芭蕉吉野にての吟ありこれは吉野の花の多きことを言

へるものにしてそこら一面の花あれば月もしばらくは
花の上を立ち去らすとの意あり此處にて「しばらく」とい
ふは稍久しきことを言へりこれは素人好のする句かれ
ども深き味の無き句あり蓋し實景を寫さずして理想に

趨りたるが爲めならん

一 わが事と泥鰯の逃げし根芹かな 丈艸

芹は春のはじめなり芹摘みにと手を出したれば芹のあ
たりに居たる泥鰯の捕へられんとや恐れけんあちらに
逃げ隠れたりといふ意にして泥鰯を擬人法にして軽く
おどけたる處丈艸の獨擅なり上品に非るも猶ほ名句た
るを失はず

一 門前の小家もあそぶ冬至かな 凡兆

冬至とは日の短き極端にして一陽來復の日なり然れど
もこゝにては右の如き意味に用ゐたるに非ず蓋し冬至

は禪宗に於て供養の定日あるを以て寺の門前に住みたる小家もお寺の縁により此日は遊び暮らすとなり門前とは普通の家の門前ならずして寺の門前なることは一句の上にて明かなり又門前の小家といふこと何の爲めの家とは分からねど前後の趣より察すれいづれ直接か間接か此等の爲めに生活し居る小家とは知れるかりこは元祿の句あるが當時にありて門前といふが如き言ひなれぬ漢語を用うることは少きにこれは却て後世蕪村の調にも似たるは如何といふに山門前の意味あれば漢音にて門前と讀ませたるかり山門に限らず佛語には漢

音の用語多しさて此句の値を論せんに固より餘韻ある句にあらねど一句のしまりてたるみ無き處名人の作たるに相違無く將た冬至の句としては上乘の部に入る可し澹泊に何氣なく言ひ出したる處却て冬至の趣ありて味ひあり

一 里人の渡り候か橋の霜 宗因

句意は橋上の霜に足跡あるを見て大方里人のはや渡りたらんかと想像したる迄なりされど此句は檀林の開祖宗因の作にして一句の目當は趣にあらず却て言葉の上の口あひにあること檀林の特色なり此句も候などの字

をつかひたるは謠曲の文句を用ゐたるなれどもそれ許りにては未だ口あひにちらず蓋し謠曲の中には里人の渡り候かといふ言葉あるべし今何の中にと記臆せぬども其謠曲の意は此邊に里人はおぢやるかと尋ねたるものあるを此俳句にては「渡」の字の意義を轉用しておぢやるといふ事には用ゐず橋を渡るの渡る意に用ゐる以て口あひとあしたるなり檀林風の句多くは此種ありさて此種の句は俳諧史の上には著き功績ありたれども今日より評せんには一文の價值もあかるべし所謂趣味餘韻の如きは毫も之を有せざるがためのみ

一 世の中は三日見ぬ間に櫻かき 夢 太

名高き句にて世の人大方は知れり句意は世の中の有爲轉變あるは櫻花の少しの間に咲き満ちたりと同じとあり誰にも能く分る句にてしかも理想を含みたれば世人には賞翫せらるゝものと覺えたりされども理想を含みたる者必ずしも善からざるは前にも言ひたる如し況んや此句の如き格調の下品なる者は俳句とも言ひ難き位なりされどもはじめの作としては保存するも可かりゆめ摸倣すべからざるものなり俗には「三日見ぬ間」と傳へたれども矢張「見ぬ間に」と「の字の方よろし」とす

れば全く譬喩となりて味少く「に」とすれば「櫻」が主とあり
實景とある故に多少の趣を生ずべし

一 朝顔や紺に染めても強からず 也 有

絲杯を紺に染むれば絲が強く丈夫になるとは俗に言ふ
所なりされど朝顔の花は紺色のものも矢張り其朝限り
の命にて強くもあらずとおどけ興じたるなり也有の句
概ね此類なりこれ等も一寸をかしみあれど初學の摸倣
すべきものにはあらず

一 御手討の夫婦なりしを衣がへ 蕪村

一 善く昔の小説に「ある筋を詠みたるあり某の男おのが主

人の娘又は腰元などに馴れ染めしがいつしか其事主人
の耳に入り不義は御家の御法度なりとて御手討にあら
べき處を側の者が申しなだめて二人の命を乞ひたるな
らん其後二人は夫婦となりて安樂に暮らし居るさまを
斯くはつゝりしなめり衣がへは更衣とも書きて夏の初
めに綿入を脱ぎ袷に着かふることをいふ特に此句に更
衣を用ゐたるは今二人の者が世帯を持ちて平穩に暮
らし居る事を現さんがためにして此等の言廻し取り合
せなど總て老練の極なり人世の複雑なる事實を取り來
りて斯く迄に詠みこゝすこと蕪村が一大俳家として芭

蕉以外に一旗幟を立てたる所以あり因みに云ふ此趣向は小説の上にはありふれたりと雖も蕪村時代にはまだ簡様な小説はあかりしものあり蕪村は儘かに小説的思想を有したり

一 おちぶれて關寺うたふ頭巾かゝ 几董

頭巾は冬季なり關寺とは關寺小町といふ謠曲の名にして小町がおちぶれし後の事を綴りたるなり昔はさるべき人の今はおちぶれて關寺小町などを謠ひ居るさまを詠めり零落せし人故に特に關寺小町を取り合せたるあり頭巾とはおちぶれし人の頭巾着て居るをいふなりう

たふ頭巾かなといふ續きにて頭巾着た人が謠ふとあること俳句に於て通例の句法なり又頭巾といふ季を結びたるは冬あれば人の零落したる趣に善く副ひ又頭巾を冠りて佗びたる様子も見ゆる故なり

一 うちそむき木を割る桃の主かゝ 白雄

桃とは桃花のことにて春季なり桃の主とは前後の摸樣にて考ふれば樵夫か百姓あとの類あるべし木を割るとは薪を割るなりうちそむきとは桃の花を背にして木を割るといふ意なり即景其まゝにして多少の野趣あり

一 時鳥鳴くや蓴菜の薄加減 曉臺

蓴菜は俗にいふじゆんさいにして此處にてはぬかはと
讀む薄加減はじゆん菜の料理のとにして鹽の利かぬ様にす
る事あらんさて時鳥と蓴菜との關係は如何と云に關係
と云程のもの無く只時候の取り合せと見て可なり必ず
しも蓴菜を喰ひ居る時に時鳥の啼き過ぎたる者とする
にも及ばず只蓴菜の薄加減に出來し時と時鳥のかく時
と略々同じ時候あるを以て此二物により此時候を現は
したるありしかも二物とも夏にして時鳥の音の清らな
る蓴菜の味の澹泊ある處能く夏の始の清涼なる候を想
像せしむるに足る此等の句は取り合せの巧拙によりて

略々其句の品格を定む

一 初雪やくばり足らいで比枝許り 蝶夢

初雪が降ることは降つたが餘り少量故何處も彼も降る
といふわけには行かず只比叡山の上許りに降つたとい
ふことあり配り足らぬとは初雪を擬人法にしてさうい
ふあり巧者か句といふべし

一 砂川や枕のほしき夕涼み 關更

砂川に出で涼みて居れば涼しくもあり且つは餘り砂川
の清らさに枕をかりて此河原表の砂の上に寐轉びたし
どの意にて輕妙なる句あり

二 追々に塔の雫や春の雪 二 柳

春の雪は早く解けるものなりされど五重の塔の屋根には日向と日陰といろくにある故に先づ一處より解け初むると思へば次第く此處彼處と解けて果てはどこもかも雫が落つるやうにありたりといふ意ありこれ
は巧者か句あり

一 菊の香や奈良には古き佛だち 芭蕉

此句に於て菊と佛とは場所の關係無し必ずしも佛の前に菊を供へたるにもあらず必ずしも佛堂の側に菊の咲きたるにもあらず強ひて場所の關係を言はゞ菊も古佛

も共に奈良にある迄の事あり作者の奈良に遊びし時恰も菊の咲く頃なりしなるべく従つて此句を以て奈良を現はしたるあるべしと雖も而も菊花と古佛との取り合せは共にさび盡したる處少しも動かぬやうに觀ゆこゝ作者の濶眼と知る可し

一 秋風や白木の弓に弦張らん 去 奈

夏時白木の弓に弦を張れば膠が剝げるとして秋冷の候を待ちてするなり故に秋風やと置けりされどもそれ許りにては理屈の句にて些の趣味無し蓋し弓は昔時に在ては神聖なる武器にして戰場に用ゐらるゝは言ふ迄も無

く墓目などして妖魔を攘ふの儀式もある位あれば金氣の肅殺たるに取り合せて自ら無限の趣味を生ずるを見る況んや其弓は白木の弓あるをや白色には神聖の感あり肅殺の感あり故に秋の色は白とす此句無造作に詠み出で、男らしき處を失はす有り難き佳句あり

一 時鳥鳴くや雲雀の十文字 去來

時鳥は夏にして雲雀は春ありされども時鳥は春に鳴かずして雲雀は夏も居る故此句は夏季とあるあり此意は時鳥は横一文字に飛ぶものにして雲雀は下より上へ眞直に上る者あり故に丁度雲雀の上る處を時鳥が横ぎり

て恰も十文字の如くありたるを云かり最も巧妙ある句也

一 卯の花の絶間敲かん闇の門 去來

闇夜に人の門を叩かんとするに一寸先は闇うしていづくを門とも定め難し唯そこの垣一面に咲ける卯の花は闇にも白く見ゆるにぞ其中に少し許り卯の花の絶えたる處こそ門からめと推量したるあり夜景奇麗されば素人の劇賞する句なり此句わるしとはあらねど素人の好く程に善き句にあらず(但し千代の朝顔の句秋色の櫻の句杯に比すれば此句の高きこと數等なり)若し絶間といふ語を改めおば今一段の佳句ともあるべし

一 生娘の袖誰が引いて雉の聲 也有

雉はやさしき姿ながらおそろしき聲を出すもの故恰もたのれ男に袖引かれたる生娘が覺えす高聲を發したるにも似たりとあり此句は生娘の聲を雉に譬へたりとするも又は雉の聲を生娘に譬へたりとするも妨げ無し

一 ひつとして戻れば庭に柳かき 蓼太

「ひつとして歸れば門に青柳の」と端唄にも謠はれたれば世の人は善く知りたらん句意は餘所で腹の立つ事ありてひつとしきながら内に歸れば庭に柳のおとさしく垂れたるを見て此柳の如く風にもさからはす只柔和にして

こそ世の中も渡るべけれど悟りたるあり箇様な理想を
含む故に端唄にもはいりたれど俗氣十分にして月並調
の本色を現はせり千代の朝顔の句よりもかは厭か心地す

一 妻にもと幾人思ふ花見かき 破笠

花見の中に交りて行けば美人が綺羅を着飾りて澤山出
で来る故にあのやうき女を我妻にしたい此やうき娘も
我妻にしたいと思ふといふことあり綺羅雜沓して都會
の花見の盛かるさまは裏面に現はれたり

一 見ぐるしき馬にのりけり雲の峰 斗入

雲の峰は夏季にして夏雲多奇峰の意あり此雲が出て來

ると熱くある故雲の峰には夏の空の晴れて熱き心を言へるが例あり此句は旅人のから尻かどに乗りて行く様を言ひしものかれは奇麗を馬に非るは勿論かれど特に見ぐるしきと言ふ上は通常のよりも餘程見ぐるしどの意あり蓋し炎天に人を載せて歩むと故馬もいたく疲れ道はかどらず毛は汗によされて如何にも見苦しきさまを言へるあり一句吟じ畢れば炎天に人馬の疲勞せしさま見るが如し

一初學の人道に進むは何れの方角よりするも勝手かれども普通の學生かどの俳句をものするは多く漢語を用ゐる漢

詩を應用する者を實際上多しとす例へば水村山廓酒旗風といふ杜牧の成句を取りてこれに秋季の景物を添へ

沙魚釣 や 水村山廓酒旗風 嵐雪

といふが如きこれにても俳句あり此邊より悟入するも可あり又成句を用ゐざるも只目前の景物を取りて一列に並べたる許りにても俳句にあらぬ事はあらじ

奈良七重七堂伽藍八重櫻 芭蕉

藪寺 や 筍月夜時鳥 成美

浦山 や 有明霞遅櫻 羽人

かどの作例もあるあり此三句の中にて成美の句尤佳か

りどす

二和歌を學びたる人の俳句に入るは詩人の俳句に入るよりも難し是れ和歌の性質の然るにあらずして今日普通の和歌と稱する者の文學的ならざればかり萬葉集の歌は文學的に作爲せしものに非れども穉氣ありて俗氣ありき處却つて文學的ある者多し新古今集には間々佳篇あり金槐和歌集には千古の絶唱十首許りある可し徳川氏の末に至りては纖巧なる方のみ稍々文學的とはされりこれ等の歌より進む者は固より俳句に入り得べくしかも詩人の俳句に入るよりも入り易きこと論を俟たずされ

ども古今集の如き言語ありて意匠なき歌より進み來らば俳道に入ること甚だ困難あるべし蓋し俳句の上にては優長ある調子を容れず寧ろ切迫ある方に傾くが故あり試みに俳句的の和歌を擧げなば

ものゝふの矢なみつくろふこての上に

霞たばしる那須の篠原

源 實朝

の如きを然りどす此外新古今の「入日をあらふ沖つ白浪」
「葉廣かしはに霞ふるなり」
「あど又は眞淵の鷺の嵐粟津の夕立の歌」
などの如きは和歌の尤物にして俳句にもなり得べき意匠あり

一前には初學者のために多少古句の解釋をせし試みたれど
そは標準とすべき者を擧げたるにはあらず故に今こゝ
に標準とすべき者十數句を擧げて第一期結尾とす可
し但し俳句に入る人織巧より信屈より疎大より滑稽よ
り各々道を選びて進むこと勿論なれども平易より進む
方尤も普通にしてしかも正路ありと思ふが故にこゝに
平易なる句を拔萃せり分け登る道はいづれありとも其
極に至れば同じ雲井に一輪の大月を見るの外はあらず

五六本よりてしだるゝ柳かき 去來

永き日や大佛殿の普請聲 李由

風や刈田のあとの鐵氣水 惟然

清水の上から出たり春の月 許六

聲かけて鶉繩をさばく早瀬かき 涼菟

鎌倉の街道をのす燕かき 尙白

春の日の念佛ゆるき野寺かき 同

静かさは栗の葉沈む清水かき 同

よろくと撫し子残る枯野かき 同

藁積んで廣く淋しき枯野かき 同

道ばたに多賀の鳥居の寒さかき 同

夕立や川追ひあぐる 裸馬 正秀

山松のあはひくゝや花の雲 その
 市中はものゝ句ひや夏の月 凡兆
 百舌鳥鳴くや入日さしこむ女松原 同
 さがくゝと川一筋や雪の原 同
 旅人の見て行く門の柳かき 樗良
 春雨や松に鶴鳴く和歌の浦 同
 我庵は覆許りの落葉かき 同

以上の句は皆句調の巧を求めず只ありのまゝの事物を
 ありのまゝにつらねたる迄あれば誠に平易にして誰に
 も分るゑるべし而して其句の價値を問へば即ち多くは

是れ第一流の句にして俳句界中有數の佳作あり

第六 修學第二期

一利根のある學生俳句をものすること五千首に及ば、直
 ちに第二期に入る可し普通の人にてても多少の學問ある
 者俳句をものすること一萬首以上に至らば必らず第二
 期に入り來らん

一句數五千一萬の多きに至らずとも才能ある人は數年の
 星霜を経る間には自然と發達して何時の間にか第二期
 に入り居る事多し蓋し自ら多くものせずとも多年の間

には他人の句を見説を聞くこと多きがためあり
 一第一期第二期の限界は判然たるものに非ず然れども俳句をものする人は初めは五里霧中に迷ふが如く他人任せに句を作るが如き感あり只句數と歲月とを積むこと多ければ略、一句のこちしつき古人の句を見ても自分の句を見てもあらしの評論も出來何となく自己心中に頼む所あるが如く感ずるに至らん此邊より上を先づ第二期と定めん
 一第二期に入り來る人と雖も其人の稟性に於て進歩の法順序に於て相異あるがために發達する部分に程度の

相異あるを免れず例へば甲は意匠の點に於て發達したるも言語これに副はず乙は言語の點に於て發達したるも意匠これに副はず丙は雅趣を解して纖巧を解せず丁は纖巧を解して壯大を解せざるが如き是れあり
 一古雅に長じて他に拙なる者纖細に長じて他に拙ある者疎豪に長じて他に拙ある者等の如きは如何の方針を取てか進むべき應へて曰く一定の方針ある可き理なし一は自己の長ずる所をして益々長せしめよ他は自己の及ばざる所に向つて研窵せよ兩者若し並び行ひ得べくんば並び行へ

一 自己の長ずる一方に向つて専攻するの方針を取るも猶多少の變化を知るを要す變化を知るは勉めて自己の句の變化を試むるに在り勉めて古今の句を多く讀むに在り古人又は一時代の格調を摸倣するも可あり

一人あり古俳人某の俳句の格調他に異なるを見て厭ふ可きものありとす一度自ら其句を摸して稍々眞を得るに及んで忽ち其格調の新奇を愛するに至ることあり故に博く學び多く作るを要す

二 諸種の變化を要する中にも最も壯大雄渾の句あるを善しとす壯大雄渾の趣は説き難しと雖も之を形体の上に

ついで言はんはんに空間の廣き者は壯大かり湖海の渺茫たる山嶽の巍峩たる大空の無限ある或は千軍萬馬の曠野に羅列せる或は河漢星辰の地平に垂接するが如き皆壯大ならざるは無し勢力の多き者は雄渾なり大風の颯々たる怒濤の澎湃たる飛瀑の瀾々たる或は洪水天に滔して邑里を蕩流し或は兩軍相接して彈丸雨注し鱗鱗相交りて水雷海を湧かすが如き皆雄渾ならざるは無し

一 一些事一微物につきても猶比較的に壯大雄渾ある者あり例へば牡丹を見る者牡丹數輪の花を把り來ると只一輪の牡丹を把り來るとを比較すれば一輪牡丹の方花の

大ききるやう感ず可し是れ花の特別に大なるに非ず一輪なれば比較すべき者なきがためなり或は庭園中の牡丹を詠ずると場所を指定せずして只一株の牡丹をのみ詠ずるとを比較すれば後者の方牡丹の大あるを感ず是れ亦牡丹の大あるに非ず比較すべき者なきがためなり（近く見れば大に遠く見れば小なるの理もあり例へば

押し出して花一輪の牡丹かか 春來

四五輪に陰日南ある牡丹かか 梅室

の二句を比較せば前者の花大にして後者の花小あるを感ずべし

蠟燭に静まりかへる牡丹かか 許六

どや／＼と牡丹つりこむ塀の内 士朗

の二句を比較せば前者の牡丹大にして後者の牡丹小あるを感ずべし之を壯大といふは文字穩當ならずと雖も小に對して大といふは則ち可あらん

一壯大雄渾あるものも繊細精緻なるものも普通の美術上の價值に於て差違なきは初に述べたる如し而して今こゝに特に壯大雄渾を擧ぐる者は此種の句尤も少きを以て一層渴望に堪へざるがためなり何故に此種の句少きかと問へば第一に世間此種の句の趣味を解する者少き

こと第二に世間此種の天然的人事的六観少きこと第三
俳句の字數少くして此種の大観を見はすに苦しきこと
是れあり

一美術の標準は吾人の主観中に一定して動くものにあら
ずと雖と客觀的に之を見れば同一の美術品にして時と
場合により價値に差異を生ずることあり即ち吾人の標
準中には斬新を美とし陳腐を不美とするの一箇條ある
が爲に客觀的に變動するを免れざる也例へば昔は面白
き繪畫ありと評せられし其意匠も今日に在りて之を摸
倣せば人皆陳腐として之を斥けん或は今日に在りて斬

新なりとてもてはやさるゝ詩文小説も後世に至り同様
の意匠を爲す者多からば終には陳腐とし厭嫌せられん
が如き類なり(元祿時代に所謂不易流行なる語はやゝ此
意に近しといへども彼時代には推理的の頭腦を缺きし
故曖昧を免れず)

一壯大雄渾ある句は少きを以て此種の句を作す者は之を
渴望し居る人より歡迎賞美せらるべし然れども壯大雄
渾なる事物は其種類甚だ少く目撃する事も稀なるが故
に兎角陳腐に陥り易し又十七八字の間に壯大雄渾の事
物を包含せしむること甚だ至難なるを以て試みに或

る大觀を取て詠するも何等の景色あるか何等の人事なるか茫漠として讀者に知れ難き者多し多少俳句に心得ある人徒らに大觀の趣味を解したるまねして此種の句を爲す者往々陳腐に陥り又は茫漠解すべからざるに至る鑑みる所あるべし

一古來壯大雄渾の句を爲す者極めて稀なり試みに我心頭に記臆し來る者を記さば

あら海や佐渡に横ふ天の河芭蕉
猪も共に吹かる、野分かな 同
湖の水まさりけり 五月雨 去來

稻妻や海のおもてをひらめかす 史邦

初汐や鳴門の波の飛脚船 凡兆

嵐吹く草の中より今日の月 樽良

五月雨や大河を前に家二軒 蕪村

湖の水傾けて田植かな 几董

蟻の道雲の峯より續きけり 一茶

蟬なくや天にひつゝ 筑摩川 同

とうくと瀧の落ちこむ茂りかき 士朗

等の類なり芭蕉の句には猶數首の壯大雄渾ある者あれどもそは芭蕉雜談に論じたるを以てこゝに言はず此外

にも比較的に壯大雄渾あるものは枚擧に暇あらず
 一纖細精緻ある句亦學ばざるべからず生來美術心に乏し
 き人又は漢學風の疎大には失する人は往々にして此種の趣
 味を解せざる者あり然れども世上所謂美術家文學家な
 る者の八九分は皆此一方に偏する者なり只纖細精緻の
 極に達する人は八九分の内更に一分を止めざる可し天
 然を講究する人一艸一木の微を知り人事を觀察する人
 一些事一微物の眞面目を識り人間心中間一髮の動機を
 觀る者は絶無にして僅有なり俳句にては人事を講究す
 ること小説家の如く精細あるを要せずと雖も天然を講

究する事は成る可く精微なるを要す蓋し精細ある人事
 は之を十七字中に包含せしむる能はずと雖も精細なる
 天然は包含せしめ得べき者多ければなり
 一纖細精緻ある句は一々に引例に及ばざる可しと雖も見
 當りたる者數首を取りて左に列記せん

- 蒲公英や葉を下草に咲て居る 秋瓜
- 草刈りて董選り出す童かお 鷗歩
- 白魚をふるひよせたる四つ手かな 其角
- 鶯の身をさかさまに初音かお 同
- 社若しほむ下から開きけり 自友

愛らしう撫子の花つぼみけり 平十

萩の花追々こけてさかりかな 孤舟

草の葉や足の折れたるきりくす 荷兮

白起す小春の草のはのかなり 吟江

埋火に年よる膝の小さよ 咫尺

はこべ草枯野の土にしがみつく 蓮之

一 壯大なる事物は少く纖細なる事物は多し數箇の纖細なる事物を合すれば一個の壯大なる事物とあるべく一個の壯大なる事物を分てば數箇の纖細なる事物となるべし

一 壯大を見る者纖細を見得ざるが如く纖細を見る者亦壯

大を見得ざるが多し注意せざるべからず

一 壯大にも雅俗あり纖細にも雅俗あり壯大を好む者單に壯大を見て雅俗を判するを知らず纖細を好む者單に纖細を見て雅俗を判するを知らず今の宗匠者流は纖細に偏してしかも雅致を解せず俗趣を主とす故に其句俗陋あり今の書生者流は壯大に偏してしかも熟練を缺く故に陳腐に陥らざれば必ず疎豪にして趣味の解す可らざる句を爲す他人の句を評するも亦た之を標準とす纖細なる者は膽を大にすべし壯大なる者は心を小にすべし

一 題目己に壯大なるあり題目己に纖細なるあり四季の題

目を以て之を例せんに
 夏山 夏野 夏木立 青嵐 五月雨 雲の峰
 秋風 野分 霧 稻妻 天の河 星月夜 刈田
 風 冬枯 冬木立 枯野 雪 時雨 鯨 鮫
 等は其壯大なる者あり又
 東風 董 蝶 蛇 蜂 子子 蝸牛 水馬 鼓虫
 蜘蛛 蚤 蚊 撫子 扇 燈籠 草花 火鉢
 炬燵 足袋 冬の蠅 埋火
 等は其纖細なる者あり壯大を壯大とし纖細を纖細とするは普通なれども時としては壯大なる題目を把て比較

的纖細に作するの技倆も無かるべからず例へば五月雨を咏するに

雲濡れて温泉を吐く川や皐月雨 春來
 山陰に湖 暗し五月雨 吟江
 と大きく深くのみものせず却て
 五月雨に蛙のおよぐ戸口かき 杉風
 三味線や寐衣にくるむ五月雨 其角
 ちどちや、纖細にもものするが如し又これと同じく纖細なる題目も時としては比較的壯大に作するの技倆をかるべからず例へば胡蝶の題にて

寐る胡蝶羽に墨つけん縁の先 坡 仄

飛びかふて初手の蝶々紛れけり 嘯山

とやさしく美しく趣向をつけるも固より善けれどそは

ありうちの事ありこれを少し考へかへて

ある程の蝶の數見るつむじかき 一 排

真直に矢走を渡る胡蝶をか 木 導

かど一は強く一は大きくものしたるも珍らかに面白か

るべし

一 雅樸を好む者婉麗を嫌ひ婉麗を好む者雅樸を嫌ふの癖

あり之を今日の實際に見るに昔めきたる老人は雅樸の

一方に偏し婉麗なる者を俗猥の極として之を斥く又今
様の美術文學家は往々婉麗の一方に偏し雅樸なる者を
取て卑野として不美術的として之を斥く共に偏頗の論
あり

一 雅樸の中にも雅俗あり婉麗の中にも雅俗あり雅樸に偏
する者は百姓と言ひ歟と言へば則ち以て直ちに是とし
復た他を顧みず是れ他の卑野と目する所以あり婉麗に
偏する者は少女と言ひ金屏と言へば則ち以て直ちに是
とし復た他を顧みず是れ他の俗猥と目する所以なり
一日に焦げたる老翁歟を肩にし一枝の桃花を折りて田畝

より歸り老姿浣衣し終りて柴門の邊に佇み暗に之を迎ふれば飢雀其間を窺ひ井戸端の乾飯を啄む是れ雅樸にして美術的なる趣向ならん十數疊の大廣間片側に金屏風を繞らし十四五の少女一枝の牡丹を伐り來りて之を花瓶に挿まんとすれば頻りに其の名を呼ぶ者あり少女驚いて耳を歌つればをかしや檐頭の鸚鵡永日に倦んで此戲を爲すあり是れ婉麗にして美術的なる趣向ならん雅樸と婉麗と共に之を美術的にせんと欲せば物の雅樸と物の婉麗とを撰擇するの必要あるのみならず之を美術的に配合するの必要あるあり然れども配合の美術的

なると否とは理論の上にて説明するは難し實際の上にて評論するを善しとす

一幽遠深靜を好んで繁華熱鬧を厭ふは普通詩人たるもの、感情なり前者の雅にして後者の俗なるは言ふ迄もなけれど去りて繁華熱鬧必ずしも文學的の分子を含まざるに非ず況んや如何なる俗事物も之を冷眼に視る時は其之を冷眼に視る處に於て多少の雅趣を生ずるをや「白眼看他世上人」と言へば世上人は極めて俗なる者なれども「白眼看」の三字を添へて無上の雅致を生ずるが如し（前項雅樸婉麗の條をも參照すべし）

一理屈は理屈にして文學に非ず去れども理屈の上に文學の皮を被せて十七字の理屈をもつものするも亦文學の應用なれば時に之を試むるも善し只理屈の爲めに文學を没却せらるゝと莫れ理屈に合せんとすれば文學に遠く文學に適せんとすれば理屈を離るゝと素と兩者全く其性を異にするより來る者故是非も無き事なり兩者を合して稍々調和したる者をもつものは非常の辛苦を要しながら存外に喝采を博すること能はざれば其覺悟なかるべからず蓋し普通文學者は辛苦の處を察せず單に其理屈的あるの點に於て之を擯斥す又俗人はそれよりも猶

卑俗に暴露的のものせざれば承知せざるべし

一理屈といふには非るも送別留別題書慶弔翻譯なども稍此に類せり例へば

生きて世に人の年忌や初茄子 几董

と言へる句の如き陳腐に似て陳腐奇らず卑俗にして卑俗ならず奇を求めず巧を弄せざる間に無限の妙味を持たせながら常人は何とも感せざる可し否何とも感せぬのみならずこれにては承知せざる可し年忌の法會などならば其人を思ひ出すとか今に幻に見ゆるとか年月の立つのは早いものとか彼人が死でから外に友が無いと

か涙ながら靈を祭るとかいふ陳腐なる考を有り難がるも常人ならば詮方無きも文學者たらん者は今少し考へあるべし此几董の句にても「生きて世に」と屈折したる詞の働きより「人の年忌や」とよろしくものしたる最後に「初茄子」と何心なく置きたるが如くにて其實心中無限の感情を隠し言語の上に意匠慘憺たる處は慥かに見ゆるかり要するに此種の句は作るにも熟練を要し見るにも熟練を要するなり

一初心の人は固より何事をも知らざれども少し俳句に入りたる人は理屈的の句又は前書附の句はむづかしさを

悟る可し而して後稍熟練を経辛うじて此種の句をもものするに至れば獨り心に嬉しく只其言ひおぼせたるを喜んで却て其句の雅俗優劣を判する能はざることあり常に自ら省るを要す

一天保以後の句は概ね卑俗陳腐にして見るに堪へず稱して月並調といふ然れども此種の句も多少は之を見るを要す例へば俳諧の堂に入りたる人往々にして月並調の句を賞し或は自らものすることあり蓋し此人月並調を見る事多からざるを以て其中の一体稍正調に近き者を取て斯く評するあり焉んぞ知らん此種の句は月並家者

流に於て陳腐を極めたる者あるを恥を搔かざらんと欲する者は月並調も少しは見る可し

一 學生時に或は月並調を摸し自ら新奇と稱す是れ彼れ自身には新奇あるものならん然れども其文學社會に陳腐あること久し無學笑ふに堪へたり

一 俳句に貞徳風あり檀林風あり芭蕉風あり其角風あり美濃風あり伊丹風あり蕪村風あり曉臺風あり一茶風あり乙三風あり蒼虬風あり然れども是れ歴史上の結果あり甲派を信する者乙派を排し丙流を學ぶ者丁流を誹らざるべからざるの理無し其何風と何派たるとに拘はらず

美ある者は之を取れ美からざる者は之を捨てよ

一世上蕉風を信する者多し我れ故らに奇を好んで檀林を奉せんと是れ所謂負惜みの瘦我慢かり而して瘦我慢より割り出したる俳句は毫も文學に非るなり我れ其角派の系統を繼げり故に其角派の俳句をものせんと此の如く系統より割り出したる俳句は文學に非るあり

一 梅に鶯、柳に風、時鳥に月、名月に雲、名所には富士、嵐山、吉野、山此等の趣向の陳腐あるは何人も之を知る然れども春雨に傘、暮春に女、卯花に尼、五月雨に馬、紅葉に瀧、暮秋に牛、雪に燈火、風に鴉、名所には京、嵯峨、御室、大原、比叡、三井寺、瀬

田須磨、奈良、宇津此等の趣向の陳腐あるは深く俳句に入る者に非れば知る能はず

一趣向は成るべく斬新あるを要すれども時には此等の陳套を翻案して腐を新とあし死を活とあすの技倆あるを要す

一日本書許り見たらん人の俄かに西洋書の一二枚を見たらんには餘り其懸隔せるに驚きて暫らくは巧拙を判定する能はざるべし西洋書許り見たらん人の日本書を見たるも亦同じそれと同しく俳句にても全く斬新ある趣向に至りては見る者其巧拙を定むる能はず或は之を以

て美の極とし或は之を以て拙の極と爲すに至る而して幾多の日月を経て反覆此句を吟誦し且つ之を摸倣する者も多くなりて後靜に初の句を味へば先に美の極と公言したる人も其褒め過ぎたるを悔い先に拙の極と公言したる人も其考の淺薄なりしを耻づるあるべし故に斬新ある句を見る人は熟吟熟考して後に褒貶す可し是れ大家の上にも免れざる一弊なりとす

一趣向の上に動く動かぬと言ふ事あり即ち配合する事物の調和適應すると否とを言ふなり例へば上十二文字又は下十二文字を得て未だ外の五文字を得ざる時色々に

置きかへ見る可し其置きかへるは即ち動くが爲めなり
 ○○○○○雪積む上の夜の雨 凡一兆
 といふ下十二文字を得て後上の句をさまざまに置きかへんには町中や凍てつくや薄月や淋しさや音淋し藁屋根や静かさや管舟や歸るさや枯蘆やを如何様にもあるべきを芭蕉は終に下京やの五文字動かすべからずといひしとぞ一字一句の推敲もゆるかせにすべからざることあり

一何といふ語句を置くべきかといふ場合に推敲するは普通の事なり然れども何かは知らず已に十七字を成した

る後其句に就きて一々に動く動かぬを檢するは學生諸子の多く爲さるる所あり自ら名句を得たりとて得意人に示す時其人此語は如何と質問すれば成程それは不穩ざりき何々の語の方善かりしものを抔氣のつく事多かるべし生前に之を發見すれば一時の恥許りにて濟む事なれども死んで後は人の非難を如何ともする能はざるべし

一四季の題目に就きて動き易き者を擧ぐれば
 春風ト秋風ト暮春ト晩秋ト五月雨ト時雨ト櫻ト紅葉ト夕立ト時雨ト夏野ト枯野ト夏木立ト冬木立ト

等數ふるに堪へざるべし一寸此題目許り見れば餘り懸隔し居る故そを置き違へるとは受取れぬ様あれど實際俳句をものする上に上手下手を問はず絶えずある事なり只熟練し居る者は常に之を省み初學血氣の士は全く不注意に経過するの差のみ

一俳句を學んで堂に入る者は意匠と言語と並び達せんところこそ最も願はしけれ誰でも先づ兩者相伴ふて進歩する者なれどそれはある一部分の事にて全体の上にあらず例へば雅樸ある句をものするには甚だ句調の和合に長じながら婉麗なる句をものするには句調全く和合せ

ざる事あり能く注意研究を要す

一言語の上にならむたるまぬといふ事ありたるまぬとは語々緊密にして一字も動かすべからざるを云ふたるむとは一句の聞え自ら緩みてしまらぬ心地するを云ふ譬へば琴の絲のしまり居るとしまり居らぬとは素人が聞きても自ら差違あるが如し一句たるみあるやうに感ずる時は一々之れを吟味す可し必ず此語は不用ありとか此語は最少し短くしても事足りぬべきにとか此語と彼語と位置を轉倒すればてにはの接續に無理を生せぬとか何とかいふやうな事あるべし趣向は老練の上にも拙

なるあり素人の上なる上手あるあり只句調のたるまぬ處は必ず老練の上の沙汰あり古人の名句杯に氣をどめて見る可し

一句調のたるむこと一概には言ひ盡されねど普通に分りたる例を擧ぐれば虚字の多きものはたるみ易く名詞の多き者はしまり易し虚字とは第一に「て」には「あり」第二に「副詞あり」第三に「動詞あり」故にたるみを少くせんと思はれ成るべく「て」には「を」を減ずるを要す試みに天保以後の俳句を檢せよ不必要ある處に「て」には「を」を用ゐて一句を爲す故に句調たるみて聞くべからず又之に次ぎて副詞はた

るみを生じ動詞も亦たるみ易し但し副詞動詞などは其使ひ様による可し今たるみたる句の例を擧げんに

ものたらぬ月や枯野を照る許り 蒼虬

といふ句の中に必要なるものは月と枯野との二語あるのみ「月や枯野を照る許り」といへば「ものたらぬ」の意は自ら其の中に含まれ「ものたらぬ月の枯野」といへば「照る許り」の意は自ら其中に含まれたり否兩方ともに實は無用の語のみ此句の意は單に「月の枯野」とか又は「枯野の月」とかいふ許りにて十分なりとす同じ事を幾様にもくり返さねば其意の現はれぬ如き心地するは初學者及び局外

者の淺薄なる考より來るなり今此句の外に枯野の月を詠ずる者を擧げんに

○月も今土より出づる枯野かな 雨 什

○松明は月の所に枯野か 大 甲

○晝中に月吹き出して枯野か 金 塙

三句各巧拙ありと雖も蒼虬の句に比すれば皆數等の上にあり蓋し此等はものたらぬとも照る許りともいはで其意を言外に含むのみならず却てそれより外の趣向を取り交せて一句を面白くしたるなり只枯野の月と許りにては單純に過ぎて俳句になり難きが爲めあり併し單純

枯野の月を詠じたる句も無きにはあらざらん

○三日月の本情見する枯野か 甘 棠

といへるが如き是なり此句固より幼稚ありと雖もまかも三日月を拾出し且つ一氣呵成にものしたる處遙かに蒼虬の上には在り而して記憶せよ雨什以下三人の皆天明以前の人にして甘棠は元祿の人を此に至り彼蒼虬が天保流の元祖にして當時の名家なるを思はゞ誰か其面に睡するを欲せざらんやまかも蒼虬の句中偶々此惡句あるに非ず彼が全集は盡く此種の塵芥を以て埋めらるゝ者あり而して此派を稱して芭蕉の正風なりと

いふに至りては眞に芭蕉の罪人なり
 一たるみにも程度あり若し前の如き議論を極論すれば名詞許り並べたる句が一番の名句となるわけなり併したるみも或程度迄はたるみたるも善し只其程度は一々實際に就いていふより外はあらじ又たるみ様にも全体たるみたるど一部分たるみたるどあり全体たるみたるは最美か若くは最不美かり大方はしまりたるが如くにて一部分たるみたるは必ず悪し
 二句調の尤もしまりたるは安永天明の頃なりとす故に同時代の句は概ね善し元祿の句は之に比すれば稍たる

みたり然れどもたるみ様全体にたるみてしかも其程らひ善ければ元祿の佳句に至りては天明の及ぶ所にあらずつまり元祿の佳句には蘊蓄多く天明には少し天保時後は總たるみにて一句の採るべきかし和歌は萬葉はたるみてもたるみ方善し古今集はたるみて悪し新古今はやゝしまりたり足利時代は總たるみにて俳句の天保時代と相似たり漢詩にては漢魏六朝は萬葉時代と同じくたるみても善し唐時代はたるみも少く又たるみても悪しからず俳句の元祿時代に似たり宋時代の總たるみといふて可からんか明清に至り大にしまりたる傾きあり

俳句の安永天明に似たり然れども人によりてたるみたるも少からざるも試みに句のたるみし有様を比較せんが爲めに元祿と天明と天保との三句を列擧すべし

立ち並ぶ木も古びたり梅の花（舎羅）の羅

二もとの梅に遅速を愛すかか（蕪村）

すくさきは庵の常なり梅の花（蕪村）

句の巧拙は姑く論せず其句調の上に就いていはんに元祿（舎羅）の句はありのまゝのけしきを飾らずたくます裸にて押し出したる氣味あり天明（蕪村）の句はどかたにゆ

るみ勝あるものを少しもゆるめじとて締めつけし一分も動かさじと締めつけたらんが如し天保（蒼虬）の句はゆるみ勝あるものを猶ゆるめたらん心持あり要するに元祿は自然なる處に於て取るべく天明は工夫を費す處に於て取るべし獨り天保に至りては元祿を摹したるつもりにて元祿にも何にもあらぬ者即ち工夫を凝らさぬふりして其實工風を凝らしたる者何の取所もさきことあり少くとも此三体に於ける句法の變化を精細に知らざれば俳句の堂に上りたりといふを得ず世上往々天保流の句を評して蕪村調など、評する者あり笑ふに堪

一元祿と天明とは各長所あり何れに従ふも善し又元祿にして天明に似天明にして元祿に似たる者も多し是れ天工人工其極處に至りて相一致する所以あり

一佐藤一齋にかゝりけん聖人は赤合羽の如し胸に一つのしまりだにあれば全体は只ふわ〜としながら終に体を離れずと申せしとか元祿調のしまり具合は先づこのものあるべし天明調はどこ迄も引しめて五分もすかぬ様に折目正しく着物着たらんが如く天保調はのろまが袴を横に穿ちて祭禮の錢集めに廻るが如し又建築に

譬は、元祿は丸木の柱萱の屋根に庭木は有り合せの松にても杉にても其儘にしたらんが如く天明は柱を四角に攢り床違へ棚を附け欄間の飾りより天井板まで美を盡してしかも俗ぢらぬ様に家は楔を打ちて動かぬ様に建てたらんが如く天保は床脇の柱だけ丸木を用ゐる無理に丸窓一つを穿ち手水鉢の腕木も自然木を用ゐる門楣の扁額は必ず腐木を用ゐしかして家の内は小細工したる机硯土瓶茶碗杯の俗野ある者を用ゐたらん如し又之を談話にたとは、元祿の人は面白くてもつまらなくとも眞實をありのままに話し天明の人は上手に面白く嘘を

つぎ天保の人はありあちのつばらぬ話を眞實らしむ話
して其實はそれも難ありけりが如し
一四季の感情は少しく天然に目を注ぐ人の略同様に感ぜ
居る所なり然れども俳句詩歌等に深き人は四季の風情
も自然に精密に發達し居るは論を俟たず面白くも感ぜ
ざる山川草木を材料として幾千俳句をものしたるもて
俳句にあり得べくもあらず山川草木の美を感ぜて而し
て後始めて山川草木を詠すべし美を感ずること深ければ
句も亦随つて美なるべし山川草木を識ること深ければ
は時間に於ける山川草木の變化即ち四時の感を起すに

と深かるべし初學の人山川草木を目のさきに一寸浮べ
たるのみにて已に句を爲す故に其句は平凡に非らざれ
ば疎豪なり去るからに天然を研究して深き者が深思熟
慮したる句を示すとも初學の人は一向に其句の美を感
せざるべし蓋し彼は天然の上に斯る美の分子あること
を知らざればあり

一世人曰く俳人京に行かんには春を可とす奈良に行かん
には秋を可とす而して後始めて名句を得べしと其言眞
に然り然れども秋時京に行きたりとも春時奈良に行き
たりとも全く其の趣味缺くに非ず否京も秋ならざるべ

からざる所あり奈良も春あらざるべからざる所あり其
 他夏又は冬ならざる可らざる所あり而して夏冬二時の
 感は世人全く之を知らざるあり例へば奈良一個處に就
 きていはんに春日社、廻廊の燈籠若草山、南大門、興福寺、衣
 掛柳、二月堂等は最も春に適し三笠山のつゞき又は春日
 社内より手向山近邊の木立又は木立の間に神社の見ゆ
 る處等總て奥深く茂りたる處は最も夏に適し古都の感
 古佛の感、七大寺の零落したる處、町の淋しき處、鹿の聲等
 最も秋に適し秋に適する處、皆冬にも適ししかも冬は
 秋に比して猶油のぬけたる處あり古人の奈良四季の句

を擧ぐれば

奈良 阪や畑打つ山の八重櫻 且 蕪

蚊蚋を出て奈良を立ち行く若葉かき 蕪村

菊の香や奈良には古き佛だち 芭蕉

奈良七夜ふるや時雨の七大寺 樽堂

の如し之を概言すれば春は美しく面白く夏は大きく清
 らかに秋は古びてももの淋しく冬はさびてからびたる感
 あり

一俳句四季の題目の中に人事に屬ししるも普く世人に知
 られざるものには季の感甚だ薄きを常とす例へば筑摩

の鍋祭の如き夏季に屬すといへども之を咏する人又其句を讀む人多くは夏の感を有せず況んやその四月なるか五月あるかの差違に至りては殆んど之を知らず故に此題を咏する者は甚だ苦吟しはた古來之を詠じたる句も無味淡泊を免れず是れ時候の聯想なきが爲めあり

君が代や筑摩祭も鍋下つ 越人

は筑摩祭の唯一の句として傳へられたる者一誦するの價値ありと雖も其趣味の毫も時候の感と關係せず寧ろ雜の句を讀むの感あり然れども是れ吾人が筑摩祭を知らざるの罪のみ吾人をして若し此祭を見聞するに慣れ

しめば何ぞ季の感を起さざらん季の感已に起らば何ぞ名句を得るに苦まんや其他大師講の如き吾人はその冬季たるの感尤薄しと雖も身天台の寺に在りて親しく之を見し者は必ずや冬季に於ける幾多の聯想を起すべきあり之を要するに我見聞すること少き人事を詠するは雜の句を感ずると同様の感ありて無味を免れざるあり一畦といへる題目は和歌以來春季に屬すと雖も吾人は兎角に春季の感を起さず却て夏季の感を起す傾きあり春季と定むること是れ恐らくは吾人普通の感情に逆らひしものにあらざるを得んや殊に

古池や蛙飛びこむ水の音 芭蕉

の句に至りては殆んど春季の感無しさりとして夏季の感をも起さず此句は只是れ雜の句と同一の感あるのみ

一第一期は何人にも修し得べく第二期の稍専門に屬す是を以て天才ある者は殆んど第一期を通過せずして初めより第二期に入るとあり然れども第二期は幾多の修業學問を要するを以て最早天才ある者もあき者も遅々として順序を追ひ階級を踏まざるべからず此點に至りては天才ある者却てあき者に劣ることあり蓋し天才は常に誇揚自負の爲めに漸次抹殺せらるゝ者あればなり

一古俳書を讀むには歴史的個人的の研究を要す甲派亡びて乙派興り丙流衰へて丁流隆なるの順序と其各派の相違と變遷の原因とは歴史的の研究の主なる者あり各俳人の特色と其創開せし流派と摸古せし程度と師弟の關係とは個人的研究の主なる者あり同時代に數派の流行せし事を知らずして無理に各派一系の傳統を立てんとする者は歴史研究家の弊なり同時に同様の流行ありしこと即ち時代一般の特色ありしことを知らずして其特色を一俳人の專有に歸せんとする者は個人研究家の弊あり或は俳諧を研究する者和歌漢詩西詩を知らず偶某歌

詩人の家集を讀んで曰く此人某俳人に似たりと面して
 彼は和歌漢詩西詩の特色を以て此一人に歸せしが如き
 こと無き事にあらず文學者は學問無かるべからざるなり
 一俳句をものするには空想に倚ると寫實に倚るとの二種
 あり初學の人概ね空想に倚るを常とす空想盡くる時は
 寫實に倚らざるべからず寫實には人事と天然とあり偶
 然と故爲とあり人事の寫實は難く天然の寫實は易し偶
 然の寫實は材料少く故爲の寫實は材料多し
 故に寫實の目的を以て天然の風光を探ると尤も俳句に
 適せり數十日の行脚を爲し得べくんば未だ可なり公務

あるものは土曜日曜をかけて田舎廻りを爲すも可なり
 半日の間を偷みて郊外に散歩するも可なり已むなくん
 ば晚餐後の運動に上野墨堤を逍遙するも豈二三の佳句
 を得るに難からんや花晨可なり月夕可なり午烟可なり
 夜雨可なり何れの時か俳句ならざらん山寺可なり漁村
 可なり廣野可なり谿流可なり何れの處か俳句ならざら
 ん

一寫實の目的を以て旅行するとも汽車ならば何の役にも
 立つまじ只心を静め氣の散らぬやうに歩む方尤も宜し
 靴下駄よりも艸鞋の方可なり洋服蝙蝠傘よりも菅笠脚

神の方宜し連なき一人旅殊に善しされど行手を急ぎ路
程を貪り體力の盡くる迄歩むは却て俳句を得難したま
へし 知ぬ地に踏み迷ひ足を引きずりてやうへに夜山
を越え山下に宿を乞ひたるなどは此限にあらず

一 普通に旅行する時は名勝舊跡を探るを常とす名勝舊跡
必ずしも美術的の風光ならずと雖もしかも歴史的の聯
想あるが爲めに俳句をものするには尤も宜し併し名勝
舊跡の外にして普通尋常の景色に無数の美を含み居る
事を忘るべからず名勝舊跡は其數少く人多く之を識る
が故に陳腐なり易し普通尋常の場處は無數にして變化

も多し且つ陳腐ならず故に名勝舊跡を目的地として途
々天然の美を探るべし鳥聲草花我を迎ふるが如く雲影
月色我を慰むるが如く感ずべし
一 芭蕉は自白して我に富士吉野の句無しといふ眞あり而
して彼亦松島に於ても一句を得ざりしあり世の文人墨
客多く此等の地に到り佳句を得ざるを嘆ずる者比々是
れあり是れ蓋し美術文學を解せざるの致す所か富士山
の形は一般の場合に於て美術的ならず只其日本第一の
高山たると種々の詩歌傳説とは之をして能く神聖から
しめたるも其神聖なる點は種々に言ひ盡して今は已に

陳腐に屬したり吉野松島の如きは其占有する所の空間
 廣くして一見猶幾多の時間を費す者は天然の美ありと
 するも美術的ならざるあり(即ち美術に爲し得べからざ
 るあり)たゞひ美術的あるも俳句には適せざるあり只此
 光景を破碎して幾多の俳句と爲さば爲し得べきも一部
 の光景は其地全体の特色を帯びざるが故に世人は承知
 せざるなり而して芭蕉の如きも猶不可能的の景色を取
 て俳句とあさんと務むるに似たり豈無理ある注文から
 ずや況んや松島の如きは甚だ天然の美に於て缺くる所多
 きをや世人は奇を以て美とあす故に松島の奇景を以て

日本第一の美となす誤れるの甚しき也古來松島の名詩
 歌亦く又其名畫なき固より其處あり若し松島の詩歌俳
 句等にして秀俊ある者あらばそは必ず松島の眞景に非
 ざる也(吉野は我之を知らず故に茲に論せず)

一今試みに山林郊野を散歩して其材料を得んか先づ木立
 深き處に枯木常盤木を吹き鳴す木枯しの風、どろどろ阪
 の曲りくゞに吹き溜められし落葉の又たはらはらと動
 きたる岡の邊の田圃に續く處斜めに冬木立の連ありて
 其上に鳥居許りの少しく見えたる、冬田の水はかれくゞ
 に錆びて刈株に稽穂を見せたる、田の中の小道を行けば

冬の溝川水少く草は大方に枯れ盡したる中に蓼ばかりの赤う残りたる、とある處に古池の蓮枯れて雁鴨の蘆間がくれに噪ぎたる、空は小春日和の晴れて高く鶯の舞ひ静まりし彼方に五重の塔聳えて其の傍に富士の白く、小さく見えたる、やがて日暮るゝ程にはらくゝと時雨のふり來る音に怪みて木の間を見れば只物凄く出でたる十日頃の片われ月、覺えず身振ひして誰も美はこゝろありと合點すべし寒さもまさり來るに急ぎ家に歸れば崩れかゝりたる火桶もあつかしく風呂吹に納豆汁の御馳走は時に取りての醍醐味風流のいづくにもある可し

一空想より得たる句は最美ならざれば最拙なり而して最美なるは極めて稀なり作りし時こそ自ら最美と思へ半年一年も過ぎて見たらんに嘔吐を催すべき程いやみなる句ぞ多き實景を寫しても最美なるは猶得難けれど第二流位の句は尤も得易し且つ寫實的のものは何年経て後も多少の味を存する者多し

一はじめの程は空想ならでは作り得ぬを常とすやがて實景を寫さんとするにつかまえ處無き心地して何事も句にならず度々經驗の上寫實も少し出來得るに至れば寫實程面白く作り易きはなかるべし空想の陳腐を悟り寫

實の斬新を悟る亦此時にあり油畫師牛伴と語る事あり
 牛伴曰く畫に於ても空想を以て競争せんには老熟の者
 必ず勝ち少年の者必ず負く然れども寫生を以てせんか
 少年の者の畫く所の者亦老熟者を驚かすに足ると眞な
 るかな

一 空想によりて俳句を得んとするには兀坐瞑目して天上
 の理想界を畫き出すも可なり机頭手爐を擁して過去の
 實驗を想ひ起すも可なり古俳書を繕きて他人句中より
 新思想を得來る亦可なり數人相會して運坐競吟探題な
 どするも可なり

二 課題を得て空想上より俳句を得んとする時に其課題若
 し難題なれば作者は苦吟の餘見るに堪へざる拙句を爲
 すこと老練の人と雖も往々免れざる所あり俳諧問答を
 る書に許六の自得發明辨といふ文あり其初に題詠の心
 得を記したり曰く

一師の云發句案ずる事諸門弟題號の中より案じいだ
 す是なきものあり餘所より尋來ればさてく澤山成
 事なりと云り予が云我あら野猿箠にて此事を見出し
 たり予が案じ様たとへば題を箱に入れて其箱の上にあ
 がりて箱をふまへ立あがつて乾坤を尋るとへり云々

と蓋し是れ題咏の秘訣なり

一 作者若し空想に偏すれば陳腐に墮ち易く自然を得難し若し寫實に偏すれば平凡に陥り易く奇聞なり難し空想に偏する者は目前の山河郊野に無數の好題目あるを忘れて徒らに暗中を摸索するの傾向あり寫實に偏する者は古代の事物隔地の景色に無二の新意匠あるを忘れて目前の小天地に踟躕するの弊害あり

一 空想にあらず寫實にあらずなかば空想に屬しなかば寫實に屬する一種の作法あり即ち小説演劇謠曲等より俳句の題目を探り來り或は繪畫の意匠を取り或は他國の

文學を翻譯する等是れかり此手段甚だ狡猾あるを以て往々力を費さずして佳句を得ることありと雖も老熟せざる者は拙劣の句をものして失敗を取ること多し蓋し繪畫小説の長所は時に俳句の短所に屬し支那文學歐米文學の長所は必ずしも俳句の長所ならざればかり

一 壯大を好む者總ての物に大の字を附して無理に壯大をらしめんとするは往々徒爲に屬す其物已に小ければ大の字を附して大からしむべし大牡丹大幟大船大家等の如し然れども其物已に大からばこれに大の字を附するは能く之をして大ならしめざるのみならず却て其物に

區域あるが如き感を起さしめ却て小からしむることあり
 一滑稽も亦文學に屬す然れども俳句の滑稽と川柳の滑稽とは自ら其程度を異にす川柳の滑稽は人をして抱腹絶倒せしむるにあり俳句の滑稽は其間に雅味あるを要す故に俳句にして川柳に近きは俳句の拙ある者若し之を川柳とし見れば更に拙あり川柳にして俳句に近きは川柳の拙ある者若し之を見れば更に拙あり
 一狂体を好む者あり狂体亦文學に屬す然れども意匠の狂と言語の狂と相伴ふを要す意匠狂して言語狂せざる者

あり狂人の時として真面目あるが如し意匠狂せずして言語狂する者あり常人の時として狂せるまねするが如し共に文學的ならず

二熟練の人にして俳句の二句目の終りにある「や」の字を嫌ふ人多し例へば

雞の片足づつや冬籠の丈艸
 呼び出しに來てはうかすや猫の戀 去來
 紙燭して廊下過ぐるや五月雨 蕪村
 家見えて春の朝寐や鹽の山 嵐外
 等の如しそは一理なきにはあらず初學の人此の種の「や」

を用うる時は全句にたるみを生ずる者多きが故ありさ
 りとてあながちに之を嫌ふはいはれなき事なり上に擧
 る所の句の如き各首趣味もあり音調も具はりて「や」の字
 の爲にたるみを生ぜざるありひたすらにたるみを嫌ふ
 より出づるの一弊あり鳴雪翁曰く二句めのやは兎角た
 るむものなれど下の五文字名詞のみならずして動詞形
 容詞などを交へたらんには多少の調和を得べし例へば
 「鶯のあちこちとするや小家がち 燕村
 といふ句の如きも「がち」の語あるが爲めに「や」の字左程に
 たるますと此言真あり

一俳句に熟達する人すら猶解し難き古句あり其句若し古
 事古語等にたよりたるものからんには思ひよりの書籍
 を探るべし然れども其語句の普通のものにして全首の
 意通じ難きハ熟々思案すべし只此一句を解する能はさ
 るの耻あるのみならず已れ未だ俳句のある部分に於て
 至らざる所あるを證する者なり有りもせぬ意味をこし
 らへて句に勿体をつけるは古の註釋家の弊あり含有す
 る意味をもよくは探らで難解の句を放擲するは今の學
 生の弊なり
 一第二期に入る人固より普通の俳句を解するに苦まずと

雖も用意の周到ある針線の緻密あるものに至りては之を解する能はず大家苦心の句を把て平凡と目するに至ることあり今古句數首を引て俳家の用意周到なる處を指摘し併せて多少の評論を費すべし

一 禪寺の松の落葉や神無月

凡兆

此句を解する者曰く只神無月の寂莫たる有様を現はしたるのみしかも禪寺の松葉と見つけたる處神韻あり云々と果して解者の言ふが如く禪寺の松葉を以て十月頃の淋しさを現はさんとならば神無月と言はずして霜月といふんに如かず蓋し霜月は神無月に比して更に靜か

ければかり解者又曰く霜月も神無月も大体同じ事なり只句調の都合にて神無月と爲りたるのみと是れ凡兆を知らざる者なり元祿の大家にして神無月は霜月に動くと知りながら猶字數の都合にて神無月と置くが如き一時の間に合せを爲すべしとも覺えず況や用意周到を以て勝りたる凡兆に於てをや凡兆の俳句緊密にして一字も動かす可らざる猿蓑を見て知るべく此點に於て飽く迄強情あるといふ去來抄にも見えたり去れば此句に神無月と置きたる者豈一時の間に合せからんや凡兆深くこゝに考ふる所ありしや必せり蓋し十月は多くの木の葉

の落つる時かれば俳諧に於て落葉を十月の季とし松の落葉の如き常盤木の落葉は總て夏季に屬す然れども松の落葉の如きは四時絶えさること論を俟たず去れば此句意の神無月の頃は到る處に木の葉落ち重なりて下駄舄履にも音ある程あるに獨り此禪寺の松の古葉の少しこぼれたる許りなるぞ清らかに淋しく禪寺の本意あるべきと口ずさみたる者あらん更に言ひ換へなばいづくも落葉だらけになりて最とむさくろしきに此禪寺の松許り植ゑ列ねて他の木をも交せねば此の落葉の頃さへ普通の落葉は無く只松葉許りこぼれて禪寺めきたりと

なるべし(此句恐らくは南禪寺より思ひつきたらんか)是に於てか神無月の語は一步も動かざるを見るべし若し霜月としなば已に落葉の時候も過ぎたるからにたとひ落葉せし處も吹き散らし掃き除けたるかも測るべからずさありては松の木許りの禪寺といふ意を現はすに足らざるなり

一 鐘樓へは懲りてはいらぬ燕かな 也 有

也有は狂文を以て名高し故に其作句數千十中の八九は狂體若しくはしやれ滑稽に屬するものなり然れども此の句の如く諧謔のはなはだしきものは他に多く類を見

す此の句の精神は「懲」の一字にあり而して人の解する能はざる所また此の語にあり故に此の句の意を探らんとからば燕が何故に鐘樓に這入ることに懲りたるかを知るにあり蓋し燕は眞一文字に飛ぶ者あればある時何の氣もかく鐘撞堂の中を目がけて飛びこみたれば思はずも釣鐘に頭を打ちつけて痛み目を見つるならん去らば鐘樓に這入らば又もや痛み目を見んかどて懲りて這入らぬあり此の如き事は實際にあり得べしとも思はねど燕の向ふ見ずに飛ぶ處より連想し來りて也有は此諧謔の句をもものしたりとればし世人或は此解釋を以て牽強

に過ぎたりとし此外に幾様の解釋を爲すものあるべし然れども其解釋とこゝに擧げたる解釋とを比較して何れか最も善く懲の意に適するか何れか最も善く燕の特性を現はすかを見よ而して後此解釋の牽強からぬを知るべし但し此句は諧謔に過ぎて品位尤低し決して佳句と稱すべからず世人又此種の諧謔の稍川柳調に近きを疑ひ俳人にして川柳調を爲すの信すべからざるを説く者あらん然れども也有の全集を見る者誰か也有の諧謔に過ぎたるを知らざらん例へば

折られぬを合點で垂れる柳かか

鐵と足三本洗ふ田打かな

足柄の山に手を出す蕨かき

もの申の聲に物着る暑さかき

片耳に片側町の蟲の聲

邪魔が来て門叩きけり藥喰

の如き巧拙は異なれども其意匠の總て諧謔に傾き頓智
による處盡く相似たり以て全豹を推すべし

一 飛び入りの力者怪しき角力かき 蕨村

俳句に入る事深く自ら俳句を作りて幾多の秀句を爲す
凡猶且つ此句を捨て、平凡取るに足らずと爲し毫も顧

ず而して其解釋を問へば則ち淺薄にして殆んど月並者
流の句を解するが如く然り蕨村をして之れを聞かしめ
ば果して如何とか言はん此の句固より蕨村集中の傑作
に非ず寧ろ下位にある者なり然れども大家の技倆は往
々惡句によりて評定せらるゝ事あり此句恐らくハ蕨村
の技倆を知るに足らんか蓋し此一句の精神は「怪」の一字
にあり人の誤解する所亦此一字にあるなり國語に「あや
し」といふ語幾様の意味に用うるや能く究めずと雖も皆
は見苦しき賤が家をあやしげある家ぞ言ひたるは少
からずされどそは此處に用らべきにふらず普通にはあ

やしといふ語を漢字の怪の意に用う怪とは奇怪妖怪怪力神怪鬼怪などゝて總て人間わざならぬ事に用う此一句の意味を探るに左の如しある處にて秋のはじめつきた毎夜村の若衆杯打ち寄りて辻角力を催すに力自慢の誰彼自ら集まりてかりそめながら大關關脇を氣取りて威張りに威張りつゝ面白き夜を篝火の側に更しける去る程にある夜の事今迄は見られぬ一人の男のつと此角力場に來りて我も力競べんといふ男盛りの若者ども血氣にはやりてこれ位の男何程の事かあらんといきなりに取てかゝれば無難作にぞ投げられける次なる若者敵

討たんと組みつけば之も物の見事にぞ投げられける其外幾人とかく取てかゝる者此有様あれば終には大關某自ら大勢の耻辱を雪がんとのさりくと歩み出づ皆々此勝負こそはと片唾を呑んで詠め居れば二人は立ち上りエイト組みオ、と引き左をさし右をはづし眸を凝らして睨み合ひたる其途端に如何したりけん彼男のつと寄るよと見えしまゝにさすがの大關も難なく土俵の真中へ叩きつけられぬ見物はあつけに取られたりやかてさまんくの評判こそ口から口へさゝやかれけれ去るにても彼の飛入の男は誰ならん此村には見馴れぬ顔の男なり

北村の人に聞けども北村の人も知らず南村の人に聞けども南村の人も知らずさりとて本場を踏める關角力といふ風采にもあらねば通り掛りの武者修行といふ打扮にもあらざりけり疑惑は疑惑に重りぬ私語はいよくかしましくなりぬ中に一人の年よりたる行司のしわぶきして小聲にていふやう皆の衆靜かにせよ彼れこそはかしの山の頂に住めるといふ天狗様にこそはあるらめ今宵の振舞を見るにたゞ人とは覺えず思ふに我等の力わざに耽りていと誇りがほなるを片腹痛しとて斯くは懲らしめ給ひたるものにぞあるらめといへば皆々顔見

合して襟元寒しと身振ひをすめり蕪村は實に此一場の事實を取り來りて十七字の中には包含せしめたり而して其骨子は怪の一字に外ならず角力は難題なり人事なり此錯雜せる俗人事を表面より直言せば固より俗に墮ちん裏面より如何なる文學的人事を探り得たりとも千兩職は終に俳句の材料とは爲らざるなり然れども蕪村が此俗境の中より多少の趣味を具する此詩境を探り出だしえかもそれを怪の一字に籠めたる彼の筆力に至りては俳句三百年間誰一人其壘を摩する者かあるべき世人亦た此解釋を不當として種々に解釋を試むる者ある

べし然れども恐らくは其解釋は怪の一字を解し得ざる
 べく然らざれば一字一句金鐵の如く緻密に泰山の如く
 動かざる蕪村の筆力を知らざる者の塵語のみにて
 一言ひ難きを言ふは老練の上の事かれどもは多く俗事物
 を詠じて成るべく雅あらしむる者のみ其事物如何に雅
 致ある者ありとも十七字に餘りぬべき程の多量の意匠
 を十七字の中につゝめんとは殆んど爲し得べからざる
 者なれば古來の俳人も皆之を試みざりしに似たり然れ
 ども一二此種の句あくして可ならんや池西言水は實に
 其作者なり

二こゝに一の意匠あり其意匠は極めて古き代の事を當時
 自身が其事に當りしことの如くに詠するなり昔は老年
 になりてもものゝ役に立たぬ人を無殘にも山谷に捨てし
 地方もありきとぞ信州の姨捨山は其遺跡となん聞えし
 其頃の事にして時は冬の夜の寒く晴れわたり満天糠星
 のこぼれん許りに輝ける中を今より姨捨てに行かなん
 とて湯婆を暖めよと命するなりこれだけの趣向がいか
 で十七字にはつゝまるべきと誰しも思はんをさても詠
 みたりや

姨捨てん湯婆に酬せ星月夜言水

情景寫し出だして少しも窮する所を見ず眞に是れ破天
荒と謂つべし(但し此句につきては我未だ全く解せざる
處あり湯婆に鬪せとは果して何のためにするにや只寒
さ故に自ら手足を暖めんとにや又は他に意味あるにや
大方の教を俟つ)

一此等の句は言水に於ても他に多くの例を見ず

黒塚や局女のわく火鉢 言水

の一句僅かに前の湯婆の句と種類を同じうするのみ此
句の意は黒塚の鬼女が局女を捕へて其肉か子どもりを
截り取り之を火鉢の上にて炙りなせし居る處なるべし前

の句も冬季としたるために凄みを添へ此句も亦冬季な
るを以て一きは恐ろしき心地す

一 身の内の道を覺ゆる清水かな 麥翹

もとより品高き句にはあらぬを能くもかゝる事まで俳
句にはしたるよと思はしむる處作者のはたらきなり句
意は三伏の暑き天氣にかわきたる咽元を濡さんと冷た
き水を飲めば其水が食道を通過する際も胸中ひやゝか
に感ずる所を詠みたるなり

一 人之性善

折つて後もらふ聲あり垣の梅 沾徳

といふ句は意匠卑俗にして取るに足らずと雖も中七字のはたらきは俳句修學者の注意せざるべからざる所あり餘所の垣根の梅を折つて今や歸らんとする時貫ひますよと一言の捨言葉を残したるを「もらふ聲あり」と手短かに言ひたるにすがに老熟と見えたり但此句の價值をいはゞ一文にもあたらす

一 絶頂の城たのもしき若葉かゝ 蕪村

句意は聞こえたる迄あり或は絶頂といふ漢語あるを見て窮策に出でたりといひ或はことさらに奇を好みたりといふ者あらん然れども蕪村は奇を好まず又窮策をも

取らざるあり特にこゝにいたゞきとはいはずして絶頂といひし所以の者は「せつちやう」といふ語調の強さがために山いよゝゝ峻あるを覺え随つてたのもしきといふ意ますゝ力を得て全句活動す可し又た若葉の候と定めたるも初夏草木の青々茂りて半ば城樓を埋めたる處は最も城の堅固なるを感すべし若し冬季を以て城樓に結ばゞ空城古城の感を増すを以てたのもしきといふ語は不適當とあるべし

一 學生俳句に多くの漢語を用ゐて自ら得たりと爲すも信屈に過ぎて趣味を損する者多し漢語を用うるは左の場

合に限るべし

一六二

漢語ならでは言ひ得ざる場合

漢土の成語を用うる場合

漢語を用うれば調子よくなる場合

一現時の新事物は俳句に用ゐて可なり但新事物には俗野なる者多ければ撰擇に注意せざるべからず

第七 修學第三期

一修學は第三期を以て終る

一第二期に在る者已に俳家の列に入るべし名を一世に擧

ぐるが如き亦難きにあらず第三期は俳諧の大家たらんと欲する者のみ之に入ることを得べし一世の名譽に區々たる者の如きは終に此期に入るを許さざるあり

一第三期は卒業の期無し入る事淺ければ百年の大家たる

べく入る事深ければ萬世の大家たるべし

一第二期は天稟の文才ある者能く業餘を以て之れを爲す

べし第三期は文學専門の人に非ざれば入ること能はず

一第二期の淺學ある者懶惰ある者猶能く之を修むべし第

三期は勵精ある者篤學なる者に非れば入る能はず

一第二期は知らずくの間に入り居ることあり第三期は

一六三

- 自ら入らんと決心する者に非れば入るべからず
- 一 文學専門の人と雖も自ら誇り他を侮り研究琢磨の意なき者は第二期を出づる能はず
- 一 一讀を値する俳書は得るに随つて一讀すべし讀み去るに際して其書の長所と短所とを見るを要す
- 一 俳句につきて陳腐と新奇とを知るは尤も必要なり陳腐と新奇とを判するは修學の程度によりて其範圍を異にする俳句を見る事愈多ければ其陳腐を感ずると随つて多かるべし第二期に在る者初學の俳句を見れば只其陳腐なるを見る第三期に在りて第二期を見る亦此の如きの

- み而して能く新陳兩者の區別を知るには多く俳書を読むに如かず
- 一 業餘を以て俳句を修する者自己の句と古句と暗合するあるも妨げず只第三期に在る者は暗合を以て其陳腐を抹殺し得べきに非ず偶々以て自己の淺學を證するのみ
- 一 空想よりする者寫實よりする者共に熟練せざるべからず非文學的なる者をして成るべく文學的ならしむるの技倆も具備せざるべからず
- 一 空想と寫實と合同して一種非空非實の大文學を製出せざるべからず空想に偏僻し寫實に拘泥する者は固より

其至る者に非るなり

一俳句の諸体に通せざるべからず自己の特色無かるべからず

一俳書を讀むを以て満足せば古人の糟粕を嘗むるに過ぎざるべし古句以外に新材料を探討せざるべからず新材料を得べき歴史地理書等之を讀むべし若し能ふべくんば滿天下を周遊して新材料を造化より直接に取り來れ

一俳句以外の文學にも大体通曉せざるべからず第一和歌第二和文第三小説謠曲演劇類第四支那文學第五歐米文學等なるべし

一文學を作為するは専門家に非れば能はず和歌を能くして俳句を能くせず國文を能くして漢文を能くせざるが如き強ち咎むべきに非ず然れども文學の標準は各体に於て各地に於て相異なるべからず故に和歌の標準を知りて俳句の標準を知らずといふ者は和歌の標準をも知らざる者あり俳句の標準を知りて小説の標準を知らずといふ者は俳句の標準をも知らざる者あり標準は文學全般に通じて同一あるを要するは論を俟たず

一文學に通曉せざるべからざるのみならず美術一般に通曉せざるべからず文學の標準は繪畫にも適用すべく彫

刻にも適用すべく建築にも適用すべく音楽にも適用すべし

一俳句の標準を得る者和歌を解釋し得ざれば其美不美を斷すべからず漢詩歐詩を解釋し得ざれば其美不美を斷すべからず繪畫彫刻建築音楽を解釋し得ざれば其美不美を斷すべからず故に俳人は深く入ると共に博く通さざるべからず

一文學に通曉し美術に通曉す未だ以て足れりとすべからず天下萬般の學に通じ事に曉らざるべからず然れども一生の間に自ら實驗し得べき事物は極めて少數あり故

に多く學び博く識らんと欲せば書籍によるを最良しとす歴史は材料を與ふべし地理書は材料を與ふべし其他雜書皆多少の好材料を與へざるは無し
一極美の文學を作りて未だ足れりとすべからず極美の文學を作る益多からんことを欲す
一一俳句のみ力を用うること此の如くならば則ち俳句在り俳句在り則ち日本文學在り

第八 俳諧連歌

一易源氏七十二候など其外種々の名稱あれども多くは空

名に過ぎず實際に行はるゝ者は歌仙を最も多しとし百韻之に次ぐ

一歌仙は三十六句を以て成り百韻は百句を以て成る長句短句に拘はらず之を一句といふ發句と最後の一句を除きて外は各句兩用あるを以て歌仙には三十五首の歌(則ち長句短句合したる者)あり百韻には九十九首の歌あるわけあり

一歌仙は長に過ぎず短に過ぎず變化度に適せり故に芭蕉以後は歌仙最も多く行はれたり初學の人連句を學ぶ亦歌仙よりすべし

一連句は變化を貴ぶ故に其打越(一句置いて前の句)に似るを嫌ふ即ち第三の句は第二句に附くこと言ふまでも無く而して第一句とは成るべく懸隔せるを要す蓋し第一句第三句共に第二句に附く故に兩句動もすれば同一の趣向となり或は正反對の趣向(黒と白、男と女、戦争と平和等の如し)となるを免れず同一の趣向の變化せざるは勿論にして正反對の趣向も亦變化せざるものなり

一二句去り三句去りなどいふことあり何句去りとは何句の間其物を詠みこむを禁ずといふことあり例へば竹は木に二句去りなりといへば木を詠み込し句より後二

句の中に竹を詠まれぬが如し此等の法則は餘りうるさ
 き様なれどもつまり法則的に變化せしめんどの意より
 出でたる者にして愚人に連歌連句を教へんがためあり
 苟も變化の本意を知る者はかゝる人爲の法則に拘泥す
 るに及ばず唯我が思ふまゝに馳驅して可なり試みに芭
 蕉一派の連句を披き見よ其古格を破りて縦横に思想を
 吐き散らせし處常に其妙を見はずを
 一古來定め來りし去り嫌ひは稍々寛に過ぐるを憂 二句
 去り三句去りといふもの多くは五句も六句も去らざれ
 ば變化少かるべし

一歌仙は分ちて表六句裏十二句名殘の表十二句名殘の裏
 六句となす

一月花の定座ある者ありそは月と花とを詠みこまざるべ
 からざる句をいふ即ち月の定座は表の第五句裏の第七
 句名殘の表の第十一句とし花の定座は裏の第十一句名
 殘の裏の第五句とす但し此句と固定せるにはあらず時
 に應じて種々に動くべし

一表六句百韻は八句には神祇釋教戀無常述懷人名地名疾
 病等を禁ず窮屈あるやうあれども一理なきにわらず従
 ふべし元來歌仙全体を一つの物と見る時は表は詩の起

句の如し故に此處は成るべくすらりとして苦の無き様に致し以て後段に變化の地を残し置くあり二の表は更に變化を要する所ありとぞ

一脇第二句には字止といふ定めあり字止は名詞止あり第三にははて止といふ定めあり此等あながら固守すべきにもあられど亦一理なきにもあらず初學は古法に従ふべし

一春秋二季は三句乃至五句續き夏冬二季は一句乃至三句續くを定めとす時の宜しきに従ふべし

一月といふ者必ずしも秋月なるを要せず殊に裏の月は秋

月ならぬ方却て宜しからん

二花といふ者必ず櫻花あるを要せず梅桃李杏固より可あり他季の花を用うる亦可あり花と言はずして櫻といふ固より可なり各人の適宜に任すべし

一戀を一句にて棄てずといふ定めあり従ふに及ばず

一百韻は初折表八句裏十四句、二の折表十四句裏十四句、三の折表十四句裏十四句、四の折表十四句裏八句あり

一百韻の月の定座は表の終より二句目、裏名殘の裏を除く九句目あり花は裏の終より二句目あり百韻にては殊に月花の定座に拘泥すべからず

- 一 百韻は長き故にともすれば同一の趣向に陥り易し全体
の變化に注意すること尤も肝心なり一句くゝの附具合
も歌仙に比すれば親句(びつたりと附きたる句)多かるべ
し然らざれば窮屈ある百韻となり了らん
- 一 規則附様等一々に説明し難し古書に就いて見るべし
- 一 俳諧連歌に於ける各句の接続は多く不即不離の間にあ
り密着せる句多くは佳ならず一見無關係あるが如き句
必ずしも悪しからず切ある關係なしとは見えながら又
前句と連続せざるにもあらざる處に多く妙味を存する
あり初學のために一例を擧げて解釋すべし

- 一 左に録する俳諧連歌は十八句より成り召波十三回の追
悼會に催せし者と知らる脇起とは其座に居らぬ人の俳
句を豎句(第一句)として作る者にて追善の場合に亡き人
の句を豎句とすること普通の例なりこれも亦しかなり
- 一 冬ごもり五車の反古のあるじかな 召波
- 五車の書といふ支那の故事を轉じて反古となし反古の
多きことを言へる者にして冬ごもりの書齋狼籍たる様
なるべし

- 一 ひとり寒夜に 甌うつ月 維駒

維駒は召波の子なれば脇を着けたるなり發句冬季なれ

ば此の句も冬季にて受けたり。甌は缶の意にて「ほどぎ」と
讀ましむる者か缶は瓦器にして酒を盛る者なるを秦人
は之を撃て樂器となすとかや五車の書といふこと支那
の故事を引きたれば脇も亦缶といふ支那の樂器を引用
したるなり但しこゝは支那の樂器を持出して撃つとい
ふにはあらず有り合せの瓶などを叩きたることをいへ
るなり前句との附様は冬籠りの中にある月あかき夜酒
うち飲みて酔ひたるまゝに瓶など打ち叩きたるといふ
趣向なり

郊外何焚やらん煙して
鐵僧

初五文字何と讀むやらん「かうぐわい」と四音に讀むにや
又は「郊外に」とあるべきを字の脱けたるにや或は外に讀
み様あるべきか知らず前句との附様は前の缶打つ月と
いへるを町はづれあとの詫住居と見たる故に郊外の景
色を見るがまゝに述たるからん此句雜の句あり冬季は
二句續くが普通の例あり

流れの末の水は二筋
臥央

これは只前句を受けて郊外の景色を更に述べ添へたる
迄あり

枝代て一のまぶしを定むらし
蕪村

まぶしとは獵師が木の枝かどを地に刺し其陰に隠れて
鐵砲を放つものかりとぞ一のまぶしとはまぶしいくつ
もあるうちに第一に射撃すへき處をいふにやあらん此
附様は前句の「流の末の水は二筋」といふを山中の谷川の
景色と見てさて箇様に獸獵の様をばいひて郊外の景色
を轉じたるかり此句普通には月の定坐なれども脇に月
を置きたる故にこゝには置かれぬ定めなり

甥の太郎が先づ口をきく百池

附様は前の山獵に鹿なぞ来るやと身を隠し息を殺して
待ち居る處に甥の太郎が先づ物を言ひたるとなり此口

をきくとは何事を言ひたるやそは定かからねども大方
は鹿の來るを見つけて「來た〜」かど、口走りたるなら
んか

新宅の夏を住みよき柱組也好

此句は全く趣向を轉じたり附様は新築成りて其祝ひに
（祝ひからずともよし）幾人か集まり居たる處に甥の太郎
が一番に口をきゝたりといふことにしたるかり

水打ちそゝぐ進物の鯛春坡

此句は前の新築の祝ひに鯛を遣はしたるかり水打ちそ
ゝぐとは鯛の腐りかけたるを防ぐなるべし此句夏季に

はあらねど水打ちそゝぐといふは夏季に尤も適切なり

裂けやすき糸の亂れの古袴 正巴

これは前句祝宴ある故に祝宴の時に古袴ひきつくるひたるさまを叙したるあり前の腐れ鯛に對してこゝには古袴の破れて糸のはつれたるを附けたる作者用意の處あり

妻を奪ひ行く夜半の暗きに 之兮

妻は「め」と讀むあり此附様は全く轉じたりさるべき戀の熱心より人の妻を奪ひ行く其身なりもしどろに袴をど裂けたるさまあり前句の「糸の亂れの」といへるさま戀歌

の言葉にて如何にも主の心までも亂れたらんやうに見ゆるからに此句は戀とあしたるあり但し袴といふによりて此戀は門地ある人の戀と知るべし（こゝにては前句の袴を女の袴と見たるにや）

ちらくくと雪降る竹の伏見道 道立

これは前句の妻を奪ひ行く夜道のさまを述べたるものにて戀の句にはあらず前の戀は都の位ある人のしわざと見つけてさては伏見と置きたるなり伏見より竹を思ひ竹より雪を思ふこの清麗ある雪中の竹逕を以て前の上等社會の戀に副ふ亦用意周到の處あり

小荷駄返して馬嘶ふらん 我則

此句は只伏見郊外の景色なり小荷駄返してといふ意何の事にや荷主に荷を返すことをいふか

泣くくも棺を出だす暮の月 自笑

前句を只夕暮の淋しき景氣と見て此附ありたるあらんか但し田舎にては夕暮に棺を出す處多し此句月を入れて秋季なり

よからぬ酒に胸を病む秋 佳業

句の表は悪き酒を飲みて胸わるくなりたりといふ迄なりされど其裏面にいさらでも人を失ひたる悲みに胸つ

かえたる頃を焼け酒飲み過ぎて猶胸苦しきよとかこちたるさまをも見せたり前秋季なれば此句も秋季にて受けたり

小商ひ露のいく野の旅かれや 湖柳

此句は小商人の旅にてわろき酒など飲みて鬱を晴さんとするにかかしく胸につかえたりといふなりいづれも秋の淋しき處より案じ出だせるあり此句露とある故秋季なり

燕来る日の長閑きけり 湖嵐

此句は只旅路のさまをいひたるなり前句は秋季にて此

句は春季かり之を「季移り」といふ此場合には前句を春季の句と見おして此句を附くるあり露は秋季あれども春にも露あること勿論なれば春と見おしても差支無きわけなり

反古ならぬ五車の主よ花の時 几董

反古ならぬ五車の書の主といふ事あるべきを發句に照應して反古ならぬとは言ひたり箇様に發句に照應せしむること定則にはあらず便宜の沙汰あり此句花の定坐にして花あり

春や昔の山吹の庵 田鶴

これは只五車の主の住居を山吹など咲きたらんと見立てたるあり「春や昔」と懷舊の意にもしたるはこれも追善の意を含ませたるあり

一此連句にて各句の附具合はそれ〳〵に味ひありて面白し只一句として面白き句は

水うちそゝぐ進物の鯛

裂けやすき糸の亂れの古袴

妻を奪ひ行く夜半の暗きに

ちら〳〵と雪降る竹の伏見道

なく〳〵も棺を出だす暮の月